

その笑顔に照らされて

沢田空

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつからだろうか

楽しいと感じ無くなったのは

両親を失った時？

違う、もっと前からだ

無理に笑顔を貼り付けるようになったのはいつからだろう

妹と弟に心配させないようにするため

親戚なんて信じられなかった

遺産目当ての奴らしかいなかった

助けてくれたのは祖父母達だけだった

でもそんな時、出会った君は俺の光だ

俺の生きる希望だ

だからこれからも一緒に隣で歩いてくれませんか？

目次

| | |
|---------------------------------|----|
| ～出会い～ | 1 |
| ～家族～ | 6 |
| ～ある日のこと～ | 12 |
| ～帰り道～ | 18 |
| ～微かな希望～ | 24 |
| ～急展開～ | 28 |
| ～照らされた暗雲～ | 35 |
| ～届くといいね～ | 41 |
| ～お泊まり会～前編 | 49 |
| ～お泊まり会 後編 (と言いながらも過去編に入ってくスタイル) | 55 |
| ～ | 55 |
| ～憎しみとは～ | 63 |
| ～灯台の光～ | 71 |
| ～夜中のできごと～ | 79 |
| 特別編 | |
| 番外編～Halloween～ | 83 |
| ～Happy Birthday～ | 87 |
| Happy birthday!! | 96 |

く出会い

六月のある日。初夏に差し掛かり暑くなってきたこの頃。羽丘高校の屋上に五人の女生徒が集まって昼食を取っていた。

「つぐみに気になる人が出来た!？」

「巴ちゃん!!声大きいよ!!」

巴と呼ばれた赤髪の少女は悪い悪いと意外そうな顔をしながら謝った。

「それにしてもくつぐみに気になる人が出来るなんてね」

「モカちゃんまで：何でみんなそんな意外そうな顔して言うの：」

ゆつたりとした口調でその声色には少なからず驚きが混じっていた。

少々うんざりしたように言うもそれもそのはずだろう。

「だつてね」

「私達、基本的にそういう話しないから」

「ひまりならそう言う話はあるだろうけどさ」

「ちよつとー巴それどういこと!？」

ピンクの髪を二つ結びにした少女が巴と食つてかかるも巴はどこ吹く風で、全く相手にしなかった。

「まあ落ち着きなよひまり。それでつぐみの気になる人ってどんな人?」

左側に赤いメッシュを入れ所詮ボブと呼ばれる髪型をした少女――蘭は弁当を食べながら聞いた。

「えっとね、その人お店の常連さんなんだけど、会ったのは結構前なんだ」

そう言うつぐみの頬はほんのりと紅くなっていた。

「どのくらいの時期なんだ?」

「去年にお店の方改装したでしょ?その時の業者さんの人なんだ」

そこで四人は頭に疑問符を浮かべた。

改装の業者↓イメージはおっさん↓イケない感じ

結論は出た。

「つぐみ（つぐ）がイケない子になった!？」

「つぐみ今すぐ諦めた方がいいよ」

巴、ひまり、蘭と諦めるように言うがモカが思い出したようにして言った。

「もしかしてこの前話してた人？」

「この前？」

「そう。スーパーの袋持ったつぐと大工さんみたいな服装した人が話してたの見たの」

「年齢は!？」

「うん、同じ位かな。遠くではっきりと見えなかったんだよね」

三人は顔を見合わせて頷いた。

「つぐみ、そのお客さんはいつもどのくらいの時間に来るんだ？」

「うん、六時から七時の間かな？」

「決まり（だな）（だね）」

「え？えっ？」

三人を見ながら困惑するつぐみ。

「なるほどくそくゆうことか。ふつつふならばこのモカちゃんも協力しよう」

つぐみは何が何だか分からないまま、昼休みを終えるのだった。

そして放課後――

「つてことでつぐの気になる人をチェックしよ」

「モカちゃん！もつと静かに!!」

店の手伝いをしながらモカに注意するつぐみ。

場所はつぐみの実家である喫茶店『羽沢喫茶店』。

この時間は案外空いていると分かっていたので五人で来たのだが
…

「それにしてももう六時過ぎてるのに来ないな」

「流石に毎日は来ないと思うよ？だってね…」

ひまりの言葉に三人は昼に想像した人物像を思い浮かべる。

「…若いつていつてもあたし達からしたらおっさんの部類に入るからね」

「一人で来るのには勇気がいるもんな…」

「それもましてや男の人だしね…」

三人揃って溜息をする。とその時丁度カランカランと入店を知らせる鈴がなると同時に一人の男性が入ってきた。

「あーいらつしやいませー！今日は遅かったんですね！」

入ってきた男性へと笑みを浮かべながら席へと案内する。男性もその笑顔を見て疲れていた顔に笑みが浮かぶ。

「今日は現場が終わるの遅くてね。家で妹と弟が待つてるから早く帰らなくちや行けないんだけど気づいたら足が進んでね」

「そうなんですか、お疲れ様です！それじゃあいつもと同じでいいですか？」

「うんお願い」

「はいー」

注文を受けたつぐみは軽い足取りで厨房へと去っていった。

それを見ていた四人は相手が意外すぎてポカーンとしていた。

「…はっ！まさか相手があそこまで若いとは思わなかったよあたし」

「巴もそう思う？わたしなんて意外すぎて開いた口が塞がらないよお」

「…まさかと思うけど同年代とか無いよね？」

「まつさかく。流石にそれは無いと思うよ？」

ジツと男性へと視線を向ける。背丈は高い部類に入るだろう。格好は所謂ニツカと呼ばれるダボツとしたズボンに半袖の黒のTシャツ。袖口のところには名前と会社名が入ってる。

顔立ちは普通、カツコイイ訳では無いがブサイク言うほど整っていない訳では無い。髪は短く揃えており、真ん中から上げている。

彼が私服であれば高校生と勘違いしてもおかしくないくらいに若い。

「(何故だかすごい見られてる…何かしたか俺?)」

見られてる彼は内心焦っていた。それを誤魔化すかのように携帯を操作しているが全くもって気が逸れない。

「お待ちせしました!・アイスコーヒーです!」

「ありがとうつぐみちゃん。それとあの四人何だけど…」

「えっ?…すいません、あの四人は私の幼馴染何ですけど何かありました?」

苦笑いを浮かべながら答えるつぐみ。

違うんだよつぐみちゃん!!幼馴染なのは分かったけど異様に見られてるんだよね!!そこに気づいてお願いだから!!

「そ、そうなんだ。仲良さそうだね」

内心で助けを求めるもしつかりと受け答えをする。

流星に視線に気づいたのか四人の方へと向かうつぐみ。

「な、何でそんなに見てるの!?海斗さんも困ってたよ!」

小声で言うつぐみにモカがふむふむくとニヤケ顔になる。

「名前で呼び合うなんてアツアツだねえ」

「なっ!?ま、まだそんな関係じゃないよモカちゃん!」

「まだってことはこれからなるのかな?」

楽しそうに言うモカ。他の三人は呆れているのかため息を吐いている。

「そ、それよりも私手伝いに戻るね!」

逃げるように去るつぐみ。去ったのを確認したモカはそれじゃ

と席を立った。

「モカどこ行くの?」

蘭の問いにモカは

「ん?…見てれば分かるよ?蘭も来る?」

それを聞いた蘭たちはまさかと思い、止めようとするも時既に遅し。

「ちよつといいですか?あたし青葉モカって言います」

「あ、うん。俺は綾部海斗って言います。こんな格好してるけど17歳だから。よろしく、でいいのかな?」

「よろしく。それで聞きたいんだけど」

「お兄さんはつぐと付き合ってるんですか？」

く家族く

モカの一言によって場の空気が凍えた。

言った本人は呆気からんとしているが幼馴染達と聞かれた本人は動揺しまくっていた。

「ちよっ！モカ!!いきなり何聞いての!?!相手だつて困ってるでしょ！」

「だつてくみんな気になるでしょく?」

「だとしても失礼だよ」

「すいません、急に変なこと聞いて」

巴がモカの代わりに謝る。それに海斗は苦笑いを浮かべながら答えた。

「ははは…大丈夫だよ。それと俺とつぐみちゃんが付き合ってるから安心して」

「そうなのか。あ、アタシは宇田川巴だ。よろしくな」

「よろしくね巴ちゃん」

「ちゃん!?!」

「?どうかした?」

ちゃん付けで呼ばれた巴は顔を紅く染め上げた。それを見た蘭たちは

「天然タラシか…」

「つぐも苦労するねこれ」

「巴ちゃんくしつかりく」

蘭は海斗をジツと見て、ひまりは苦笑いを浮かべモカはフリーズした巴をどうにかしようとしていた。

その後、復活した巴も含め四人から色々と聞かれた。

「そういえばさつき17歳だからって言ってたけどその格好だとバイトじゃないでしょ?それに今日平日だし」

「あー…まあそのなんだ。家庭の事情で高校には行ってないんだ」

「ええ!?!そうなの!?!」

「ひまりうるさい。まあ深くは聞かない。色々あるのは分かったか

ら」

蘭の答えを聞いて少し驚いた。実際にこの二年間でこれを言った場合は必ずと言って理由を聞かれたからだ。

「…ありがとう」

「…お礼言われるようなことしてない。それに家のことを言いたくない気持ちは分かるから」

ぷいっと顔を背けるも耳が少し紅い。多分この子は素直にお礼を言われること、ましてや褒められることに耐性が無いのだろう。

「蘭が照れてる〜」

「あはは、確かに耳が紅いな」

「〜〜〜うるさい!!」

「ははっ。まあ特に用事が無ければ俺はここにこの時間帯にいるから暇だったらまた話し相手になつてくれよ」

そう言い席を立つ。ついでにと彼女達の席の伝票も持って。

「つぐみちゃん会計いいかな?」

奥で閉店の作業をしているのであるうつぐみへと声をかける。そうするとひよこつと顔を出した。

「あ、今行くんでちよつと待っててください!」

「急がなくていいから大丈夫だよ」

そう言い返した彼は携帯を操作する。

そんな彼を見て自分達も帰ろうと伝票を探すも見当たらない。

帰ってきたつぐみがレジで会計する声が聞こえる。

「1980円になります。でもいいですか?え?気にしなくていいって…。じゃああたしの方から説明しとくので。はい、お釣りです。また来てくださいいね!」

「じゃあまたねみんな」

ニコツと笑って彼は帰っていった。そんな彼が出ていってからはっとして伝票を探すもやはり無い。

結局つぐみに聞いたところ

「みんなの分も海斗さんが払ってくれたよ。何でも話し相手になつてくれたからそのお礼だつて」

つぐみにそれを聞いて、一同は驚くも閉店時間が迫っている為につぐみにまた明日と伝え、店を後にした。

〜帰り道〜

「意外な人だったね海斗さん」

「同い年、じゃなくて一個上か。それでも見えなかつたな。さりげなくアタシ達の方まで払っていく所なんて特にな」

「…何か悪い気がする」

「ど〜ゆうこと〜蘭〜？」

少し俯いて言う蘭にモカが聞く。

「入ってきた時に兄妹がいるって言ってた。それに家庭の事情ってことは金銭的に何かあると思っただから」

「あ…」

ひまりがすまなそうにしているが他の四人も同じような表情をしている。

その後、和気藹々と話すこともなく各々帰っていった。

だが彼女達の頭に残ったのは今日の出来事と申し訳なさの念だけだった。

「ただいまー」

四人より早く店を出た海斗はそう言い家へと入った。

そうすると階段に少年を見つける。

「今日は割と早いな理斗」

「…まあテストもあるし、普通だろ」

それだけ言っただけでリビングへと入っていく。それを見ていつも通りだな、と肩を竦めリビングへと入る。

荷物を置いて、台所へと向かうとそこには既に少女がいた。

「悪いな未来、作っててもらって」

「ううん、わたし結構好きだから気にしなくてもいいよお兄。それよりも今日も寄ってきたんでしょ？羽沢喫茶店」

「んぐっ…まあそうだけど」

手を止め、わかりやすく溜息をつく。

「本当にお兄はダメダメだよね。仕事遅く終わったってのはまだ分かるけどさー。何で寄っちゃうかね？」

「悪いとは思ってるよ？でもあそこの珈琲、美味しいからさ」
手を洗い未来の隣に立つ。

未来も俺が隣に立つと任せたとやわんばかりお風呂入るね、と行つた。

「この感じだとほとんど完成してるな…。じゃあ簡単なのを一品作るか」

小さく呟き、調理へと入った。

「はあー」

その後、三人で夕飯を食べた。理斗と未来の学校の話聞きながら。そして今は一人湯船に浸かっている。

海斗達には両親がいない。海斗が中学生に上がった時期に交通事故で他界している。

それも皮肉なことに両親の結婚記念日に。

海斗のいた中学は全員が部活動へ参加することが絶対だった。小学生の時から野球をやってきた海斗は野球部に入っていたのだから、両親が亡くなりまだ小学生の兄妹を誰が見るのか。

それは祖父母がわざわざ遠い所、見に来てくれていた為心配はあまりなかった。

だが祖父母もかなり高齢だった為、二人の面倒は自分が見ると。だから高校にも行かず働くと言った。

それに対して二人は猛烈に反対したが海斗は頑なにその意志を貫

いた。

「つたく。何であんなにも頑固かねえ…。歳が上でも現場では俺の方が一応先輩なのに…」

今日の事を振り返り思わず愚痴が零れる。

海斗が働いている会社は元々父が経営していたのだ。父が亡くなり、父の跡を引き継いだ今の社長に頭を下げ雇ってもらったのだ。それが約二年前のこと、海斗が中学を卒業した次の日である。

「…そろそろ出るか」

一人でゆつくりしていると嫌な事を考えてしまう、だからいつもは長風呂はしないのだから今日は珍しく長かった。

恐らく疲れているのだろう、そう結論を出し風呂を後にした。

「お兄やっとうた」

「何だまだ起きてたのか」

時刻は十一時。リビングに戻れば待っていたのか未来がソファーにいた。

「早く寝ないと美容に悪いぞ?」

「今日はいんですうー」

いつもは美容が、とか口癖のように言ってる癖に。

タオルを肩にかけて隣に座る。

「それで何かあったのか?」

大抵こういう時の未来は悩んでいる時だ。愚痴を聞いてほしいのか、それとも助言をして欲しいのかは分からないが。

可愛い妹が悩んでいるのだ。力にならない兄貴はいないだろう。

「…あんまり無理しないでね?お兄がわたし達の為に働いてくれているのは知ってる。でも無理して倒れたら…って考えちゃうの。それに…」

「みなまで言うな。大丈夫だから安心しろ」

「そう言って前に倒れたよね?だからお兄の大丈夫は信じない」

うぐつと核心を突かれたじろぐ。それもそのはず、この男一年前に二十七連勤してぶっ倒れたのだ。それもまだ朝から夜遅くまでならいいでしょう。

だが彼は昼間働きそのまま帰らずに夜勤を約二週間以上続けたのだ。

「未だに怒ってらっしやるんですか？未来さんや」

「べっつにー。怒るよりも心配したし今もやってるなら呆れるし殴るから」

笑顔で握り拳を向けてくる未来。全く頼もしいなほんと!!

「今はやってないから大丈夫だって。時間が時間だからそろそろ寝ろ」

「ええー。やだって言ったら?」

「物理的に寝かせる」

「おやすみお兄!!」

足早に自分の部屋へと戻って行った。：それにしても早くないか？一瞬でいなくなったぞ…。瞬間移動でも使えるようになったのか？…まさかそんな人外なこと妹が出来る訳ないし疲れてんな。

「俺も寝るかな、明日も早いし」

そんな考えは置いといて彼も部屋に戻り明日に備え眠った。

くある日のことく

「一人揃ってないけどかんばんーい!!」

「「かんばんーい!!」」

どこにでもあるファミレスの中、かなりの人数の声が響く。

よく見れば制服を来ていることから高校生なのは分かる。だが全員が同じではなく、別々である。

凡そ、中学時代のクラスかなにかの集まりなのだろう。

「でもいいの先に始めちゃって?」

「大丈夫だって。あいつからも先に始めててくれって連絡があったし」

「ならいつか」

二人は話を切り再びクラスの輪への戻った。

しばらくして誰がこちらへと向かってきた。作業着に半袖と仕事終わりであろう少年が。

「おせーぞー!綾部!」

「やつと来た!おっそーい!」

彼に遅れたことを笑いながら言うメンバー達。それらに対して海斗は一言謝罪を入れ、席に座った。

「にしてもこんな時間まで仕事なんて社畜見てえだな」

「いつもこんな時間なのー?」

「まあ大体こんな時間だな、仕事自体慣れたし楽しいからいいけどよ」

少し疲れた表情で言うも、本当に楽しいのだろう。その顔は笑顔であった。

「仕事お疲れ様海君」

「ありがと瑞稀。高校はどう?楽しい?」

海斗が質問したのは委員長であった倉梨瑞稀。今回クラス会に誘った張本人である。

そんな彼女に自分が行っていない高校の話聞いた。

「:まあ楽しいよ。あたしの行ってるのは女子高だからあれだけど」

「羽丘高校だっけ?未来もそこに通ってるから会った時はよろしくな

？」

「えっ!? そうなの? 言ってくれば良かったのにー! なんでもっと早く言わないの!」

「いや…別にいいかなって…」

「よくない! 未来ちゃんはあたしの妹であるんだから!」

「例え瑞稀でも未来はやらんぞ?」

今までおちやらけた雰囲気だったはずが妹である未来の話になった途端、真面目な雰囲気になった。

「はあ…もうそれ病気だよ。シスコンにも程があるよ…。そろそろ妹離れしたら?」

「未来が兄離れしたらな。それにもし、無いと思うがもし彼氏が出来たらそとりあえずいつをぶっ飛ばす」

「…もう手遅れか」

そんなアホなことを言う海斗に呆れ、溜息しか出なかった。

「それじゃ時間もいい感じだからそろそろお開きにしようか」

代表で言った彼女の言う通り、時刻は既に9時を回っている。高校生である者なら大方親のから何かしら連絡の一本はあるだろう。先程から数人が携帯をひきりなしに確認している。

「会計は伝えてあった通り、一人千五百円ね」

皆が皆幹事である瑞稀へと指定の金額を出していく。

そんな時――

「全額綾部が出せばいいんじゃない?」

「確かに。働いてるからそのくらい出せんだろ?」

「ちよ、ちよつと待てよ。なんで俺が出さなくちやいけないんだよ」

「いいじゃねえか別に。お前は高校行かずに働いてるんだから出せよ」

二人の男子がそんな考えを言ってしまった。それを聞いた連中は同調していき終いには出さないと言い始めるものも出てしまった。

「み、みんな! それはダメ! 全部海君に払わせるなんて…。海君は家族の為に――「言わなくていい」…でも」

「今言つたてこいつらに關係ないしどうでもいい。んで何だ、お前らの分も払えばいいんだろ？」

瑞稀のいるテーブルに置かれていた伝票を持ち会計へと向かう。

「さっすがー。働いてるんならそんなくらい端金だろ」

「いやーこういう時に綾部がいて良かったわ。俺ら払わなくて済むし」

そんな会話が聞こえたせいで苛立ちが募る。彼だつて働いていると言つてもまだ子供だ。当然のようにそんな事を言われれば苛つきし当然のように怒る。

「チツ…（明日は完全に羽沢喫茶コースかな）」

一人会計をしながらそんな事を考えていた。

会計を済ませ外に出れば全員がいる。そこには払っていない奴らもいるし、払つてくれた者もいる。

払わなかつた奴らは何も感じないのかバカ笑いをしてはしゃいでいる。

「海君…」

「気にするな、別にこうなるだろうと思つてたしな」

「でも…海君が働いてるのは未来ちゃん和理人君の今後の為なのに…」

俯き申し訳なさそうにする。それに罪悪感を感じる。俺が働く理由は瑞稀には話していた。だから責任感の強い彼女にすぐく申し訳ない。

「もう大丈夫だから。それじゃ俺帰るから」

「ま、待つて」

帰ろうとした海斗の腕を掴む瑞稀。

「とりあえずこれ」

渡されたのは金だつた。恐らく先に集めていたものだろう。

「別にいいよ、みんなに返しといてくれ」

「そのみんなから渡してつて頼まれたの。海君に出させるのは申し訳ないからつて。あのバカ達のこととはほつといていいから気にしないでつて」

「…つたく。わかった、受け取る」

渋々と言った形で受け取り海斗は家へと足取りを向けた。

「海君…」

「瑞稀大丈夫？」

話しかけてくれるのは嬉しいけど、今は大丈夫じゃない。みんなが集まるって言い始めたのは私だし、今回の事は完璧に私に非がある。

だから兄妹の為に働いてる海君に申し訳ない。

「大丈夫だよ、心配してくれてありがとう」

私がそう言うのと彼女はほかの友達の前へ戻っていた。

「にしてもあいついると楽だわほんと」

「だよなー。ほんといい金づるだわ」

海君が出せばって言い出したバカたちが笑いながらそんなことを言う。

それに他のみんなはいい顔をしない。当たり前だ、海君は優しく、責任感があつて、頼りになる。でも不器用で人付き合いが苦手で。

一緒にいたからこそ分かる微妙な変化なかも自分のように嬉しくて。

「…いい加減にして」

「ああ？なんか言ったか委員長？」

「聞こえなかったの？あなたの耳、難聴なんじゃない？」

「なんだとてめえ!!」

「ほら、事実だからそういう態度をとるの。私は昔からそんなあなたの事が嫌いだったの。あなたを振ったのもそういうことよ」

それを聞いた周りはクスクスと笑っている。こいつが振られたって話は学年のみんなが知っていたことだろう。

…多分学校中に知ら渡ってたかも。

「調子にのんなよ！クソ女!!落ちこぼれに会って強くでもなったつもりか!?!あいつがないと何も出来ないお前に言われる筋合いなんかねえよ!!」

今何て言った？落ちこぼれ？誰が？もしかして海君の事？

「は、はは」

「何がおかしいんだ!？」

「何がってそんなの決まってるでしょ、あなたよ。何をしても海君に勝てないあなたのことよ。勉強も運動も全て海君に劣ってる負け犬のあなたよ。終いには底辺の高校に行つて不良にでもなつたつもり？中途半端なのよ全て。…私帰るわ」

私が一息に言った事が意外すぎてみんなが啞然としていた。私が道を通ろうとすればみんながどいて道が出来る。

…まるでモーセの十戒のようね。

ふと昔のことを思い出す。海君はぶつきらぼうでほとんど笑わな
い人だった。でも困っている人がいれば助けるし、面倒見が良かつた。

そんな海君はモテにモテまくつてた。彼が知らないところで。

それが自分の中では面白くなくて。小学生の時なんて橋渡しにラブレターを何てのは日常のようなものだった。

…私は海君の事が好き。隠すことなんて無いし、彼はそれを知っているから。

だから、だからこそなのかはわかんない。おじさんとおばさんが亡くなつたつて聞いた時は耳を疑つたしものすごく心配だった。

それに高校に行かないつて聞いた時も信じられなかった。高校に入つても私の隣に海君がいると思つていたから。だから進路も共学じゃなくて女子高を選んだ。

海君がいないならいいつて。

だから中学校を卒業した時に告白した。でも海君は

『…悪い、嬉しいけどそれに応えられない。俺も瑞稀の事は好きだ。でも俺にはお前の横に立つ資格がない。だから酷いこと言うけど—
—諦めてくれ』

下手な作り笑いを浮かべてそう言った。

彼は笑顔を浮かべるのが苦手だったな、何て場違いなことを考えていたのは今でも覚えてる。

でも、でもね海君。私はそんな海君の事が好きなんだよ？資格なんていない。高校に通ってなくても関係ない。私が、私が好きになった人が横にいて欲しい。ただそれだけの事だから。自分勝手だと思う。それでも私の横には海君にいて欲しい。

本当に我儘でずるいと思う。でもね――

「だからって諦めないよ。覚悟しててね？」

それに浮かぶ月を見ながら密かに決意を固めたのは私だけの秘密。

く帰り道く

「海斗！10ミリのビットとインパクト！それとサンダー！」

「はい！」

都内の建設現場。そこを忙しく動く影がひとつ。今回の仕事は自分が尊敬している人と仕事が出来ると張り切っていた。

言われた通りに道具を先輩の近くに起き一声かけ、自分の仕事へと戻る。

基本的に海斗がやるのは部屋の壁になるものを貼っていく仕事だ。一言で言えば内装屋である。

流石に二年目にもなれば一日で一部屋はできるようになった。

しかし今回は現場の規模が大きく2人では期間までに終わらないと考え海斗よりも出来る先輩が壁を貼っていき、海斗が手元への作業へと回っているのだ。

別段、それだけが仕事ではなく、貼りやすいように先回りし作業を進める。

その途中で先輩を見て必要なものを用意し、言われた事をこなしている。

ただそれだけと言われれば返せはしないだろう。つまらないとも取れるだろう。だが海斗にとってはそれが楽しくてしようがなかった。

自分の知らない技術を見れる、それを盗み自分のモノに出来る。今以上に仕事が出来るようになれる。そう考えただけで嬉しさが込み上げて来るからこそ年齢で何を言われようともこの仕事を続けているのだ。

「いやー海斗が先に色々と進めてくれてるおかげでこっちも仕事がしやすい、いつの間になんかに成長したんだコノヤロー」

「俺なんてまだまだですよ。流石に二年も先輩の下でやってれば自然と出来ますすって」

「の割に最近、別々だったけどな」

煙草を吸いながら笑う先輩に確かにそうですね、と返し笑う。

そこでん、と煙草を差し出してくる。言わずもだか海斗は未成年である。吸うのも禁じられているし、勧めるのもダメである。

「先輩、何度も言うんですけど俺、未成年ですからね？」

「いや知ってるけど？」

首を傾げ、いいからと勧めてくる。仕方なく貰うが火をつける気は毛頭ない。

「別にバレなきやいんだよ。俺なんて中卒で働き始めたが無理やり上に奴に吸わされたぞ。何だ、無理矢理の方が良かったか？」

「それ、そっち気がある人しか喜ばないでしょ。俺は吸わないっすからね」

「ったく、変なところ頑固だよなお前。ちよつとくらいって思わねーか？」

「思いませんよ。煙草なんて親父がいなくなった日だけで十分ですよ」

俯き少し自傷気味に笑いながらそんなことを言う。この先輩も父が会社を立ち上げた時からいる古参。時には幼馴染として、時には同じ職に就くライバルとして、想いの丈が他の人よりも違う。

先輩も海斗のその顔を見て、前社長である綾部雅人の姿が重なった。

雅人も無理にでも笑顔を作ろうとする時同じ顔をしていたと。

「…そろそろ戻るぞ」

「ういっす」

休憩を終わりにしようとし立ち上がる。その時、海斗が暗い顔をしていたのに気付いた。だがそれも一瞬で、気には止めなかった。

それが後に厄介事に繋がらずとも知らずに。

「あつ、一番星!」

バンドの練習帰り、After glowでは恒例の一番星探しが行われていた。

もちろん結果はいつもと同じである。

「さつすがーつぐー。見つけるの早いねー」

「今日のは今までで最速なんじゃない?」

「そんなことないよ? いつもと変わらないよ」

モカと蘭が言うのもわかる。今日のは始まってすぐに見つけたから。

普段ならもう少し時間がかかるのだ。

「つぐー、何かいい事でもあったんじゃないの? ほら、お姉ちゃんに言ってみな!」

「いやひまりはお姉ちゃんでは無いだろ」

ひまりがつぐみの頬を弄り回しながら聞く。ひまりのお姉ちゃん発言に巴がツッコミ、他の二人も頷いてる。

「ちよ、ちよつとー! 何であたしがお姉ちゃんって言っただけでそんな反応するの!?!」

「だってーひーちゃんはお姉ちゃんっていうよりもーお母さんだもん」

「モカ、その理由は?」

蘭の問いにモカは満面の笑みで答えた。

「ひーちゃんの家に行く絶対にお菓子が出るのとく意外にも面倒見がいところとか」

「∴最初のは関係ないとしてモカの言う通りかも」

「うう∴。つぐー!! 蘭とモカがいじめてくるく!!」

そんなことを言いながらつぐみに抱きつく。つぐみも苦笑いを浮かべながらも声をかけた。

「大丈夫だよひまりちゃん。ひまりちゃんは優しいお姉ちゃんみたいだから」

「おお、流石は大天使つぐみだ」

「大天使つぐみ？何それ？」

蘭が聞き返すと巴は噂について話し出した。

「常連の人たちの間で結構話題になってるみたいなんだ。元々可愛かったつぐみが最近はずっと可愛くなった、って」

「そ、そんなことないよ。確かに商店街とか行くとよく声かけられるけど…」

つぐみの放った一言に蘭がいち早く反応した。

「それって男の人？若いの？」

「わあ〜蘭過保護〜」

モカはそういうもひまりも巴も呆れ顔になっている。

蘭はつぐみに対してかなり過保護であるのだ。つぐみは少し、いやかなり溜め込みすぎて、誰にも言えない所がある。そのせいで一度倒れたことがある。

だから蘭は心配なのだ。親友が変な男に寄らないように、泣かないようにと。

「ち、違うよ蘭ちゃん。普通に商店街のおじさんとかおばさんだよ。

……あと」

「あと？」

「海斗さんに可愛いねって言われた事はあるよ」

それを聞いた途端に空気が凍った、いやただ一人ニヤニヤと笑みを浮かべてる者がいた。

「つぐはさ〜海斗さんのこと好きなの〜？」

「す、す、好きとかそんなじゃないよ!?そ、それに私にはもったいないと言うか…」

「何がもったいないんだ？」

「ひゃあ!？」

つぐみがおかしな声をあげる。

それと同時に近くにいた巴の後ろに隠れる。

「…ひどいなつぐみちゃん。確かに急に声掛けた俺も悪いけどそこま
で驚く？」

そこには肩を落とした海斗がいた。荷物を持って、作業着。仕事帰
りである。

「うう…、ごめんなさい。びつくりしちやって」

「そこまでしおらしくしないで。所でバンドの帰り？」

「あ、そうなんです」

二人は会話を弾ませるが取り残された四人の頭には？か浮かんだ。

「なあ海斗さん、何でアタシらがバンドの帰りって分かったんだ？」

「そりやあつぐみちゃんから幼馴染とバンドやってるって聞いてたし
モカとかひまりちゃんが背負ってるのギターかベースでしょ？そこ
から予想しただけだよ」

「おおく名推理く。ちなみにくあたしはどっちやってると思うく？」

モカが海斗の予想に驚きながらもそんなことを聞いた。それに対
して海斗はそうだなあ、と考えた。

「悪いんだけど手、見せて」

その言葉に蘭と巴は疑問に思った。手を見てギターかベースを
やってるのを判断出来るのは音楽を、それもそれらの楽器をやってい
た人くらいしか出来ないだろう。

モカとひまりは特に気にしていないが。つぐみに関しては少し不
貞腐れている。

「いいよ。はくい」

モカが手を出し、その手を海斗が見る。少し見てひまりのを見ると
確信めいた顔で答えた。

「わかったよ、モカがギターでひまりちゃんがベースだね」

「お当たり前」

「凄いですね海斗さん！」

手を見せた二人は感心しているが残りの二人は違った。

「ちよつと待って。海斗…さんはベースかギターやってたの？」

「別に呼び捨てでいいよ、蘭ちゃん」

「じゃあ私も蘭でいい。それでどうなの？」

海斗はすぐには答えなかった。否、答えられなかった。

「大丈夫ですか海斗さん？」

つぐみに言われハツとしてごめん、苦笑いを浮かべ答えた。

「昔にやってただけだよ。期間は短かったし、両親が趣味でバンド組んでたから」

「そう、なんだ」

そこで海斗のスマホに着信がかかってきた。それを見た海斗はま
ずいと内心思い一言入れて出た。

『お兄何してんの！遅くなるなら連絡してって言ってるでしょ！』

「ごめん未来、たまたまつぐみちゃん達にあつて話し込んでさ」

『…ホントにごみいちゃんだな』

「そこまで言うか未来!？」

『いいから早く帰ってくること!!いい!?!』

「わ、わかった」

プツツとそこで電話が切られた。妹の未来からの電話であったが
やり取りはまるで嫁の尻に敷かれている夫のようだった。

海斗は溜息を吐いた。

「それじゃ妹が激おこだから俺帰るね、送れなくてごめんね。気をつ
けてね」

蘭たちが何かを言う前に小走りで夜の住宅街へと消えていった。

く微かな希望く

「てめえいい加減にしろよ!!何様のつもりだ!ああ!?!」

「いい加減にすんのはてめえだ!仕事もしねえで何やってんだ!!頼まれた事も出来ねえのにでかい口叩いてんじゃねえよ!!」

都内の現場。二階のフロアで胸ぐらを掴み、今にも一触即発の雰囲気二人。一人はいかにも職人、と言えば分かるだろうか。歳は四十年代半ばであろう彼は、今回の事に納得がいつてなかった。

その原因は――

「何で俺がてめえの指示に従わなくちやいけねんだ!?!歳も経歴も下のお前によ!?!」

「歳もクソもあるか!!ただ無駄に歳取っただけで実力もねえ癖に口だけは達者だな!ああ!?!文句いいたけやあ俺よりも出来るようになってから言え!」

「てめえっ!」

右腕を振り上げ、目の前の少年に殴りかかろうとした時、流石にまずいと思った他の業者の職人達が止めに入った。

男は暴れながらも目の前にいる憎たらしいガキを睨んだ。

だがそれがどうしたと言わんばかりに少年はどこ吹く風。

彼はその少年の姿が尚のこと気に食わなかった。

歳は男の方が一回りも二回りも上だろう。なのに彼には敬う感じが感じられなかった。

それに今回の現場で何故自分がリーダーでなく、この元社長の息子がリーダーなのか、だ。

もちろん元社長の息子という肩書きで今回のリーダーになった訳ではもちろん無い。長期の現場で初めから入っていたのが彼で、彼の先輩が他の現場に行くから任せた。としつかりとした理由があるのだがこの男はそれを知らない。

知るはずも無いのだ。少年が高校にも行かず働いている理由も。今のよう出来るまでに怒られ続けたことも。

「すいません、皆さん。うちの者が迷惑をかけました。あとは大丈夫

です。ご迷惑をお掛けしました」

少年は取り押さえていた他の職人達に頭を下げ、礼を述べた、それを見た職人達も各々仕事へと戻っていた。

抑えがなくなった男は少年へ掴みかかった。だが言葉を発しようとした時には顔を掴まれ、地面へと叩きつけられていた。

そして見たのだ――

「いい加減にしろよ。これ以上にかするんなら――二度と来るな」

言葉に力を込め、絶対零度の視線で見つめる綾部海斗の見た事の無い顔を。

「はあ…」

溜息を吐きながらテーブルへと突っ伏す。場所は土曜日の昼過ぎの羽沢喫茶店。昨日までの現場がやっと終わったので社長から一週間の休暇を貰った俺こと綾部海斗。いえーいピースピース。

…って俺誰に言ってるんだろ。

「大丈夫ですか海斗さん？」

「うんまあボチボチかな…」

目の前に天使…つぐみちゃんが。ほんとに謎なのだが彼女はなぜこんなにも可愛らしいのだろうか。

あ、コーヒーありがとね。

「今日はお仕事休みなんですか？」

「うん？そっだよ。やっと昨日までの長期現場が終わってさ、社長が一週間休みやるから兄妹孝行でもして来いって笑いながら言ってきたから今週は全部休み」

それを聞いたつぐみちゃんは自分のことのように嬉しそうだった。

「つぐみちゃんは今日一日お店の手伝い？」

「いえ、夕方からバンドの練習があります」

そっか。今日は一日ここにしようと思っていたが夕方からいらないならそれに合わせて帰ろうか。あ、そうだ二人の好きな物でも作ってあげるのも悪くないな、なんて考えていたらつぐみちゃんが顔をグツと近づけてきて――

「あ、あのー良ければバンドの練習見に来ませんか？」

「何であんたがいんのよ」

「成り行きだよ」

つぐみちゃんの誘いに特に予定の無かった(好きな物を作るのは明日でも大丈夫なはず)俺はのった。初めは断ろうと思ったが：あれはずるい。上目遣いにうるうるした目、更に少し恥ずかしかったのか頬を紅く染めていた。

可愛すぎんだろオオオ!

それをされて断るやつは男じゃね。それに断る奴がいるならばつとばす。

とまあ経緯はこうであり、スタジオに着いてから蘭の一言があればある。

「はあ…まあいいけど邪魔はしないでね」

それだけ言ってスタスタとスタジオへと向かってしまった。

まあそれに対して手の掛かる妹に似ているな程度しか思えなく、思わずフツと笑いが零れた。

蘭にはそれは気づかれていないようなので、後を追う。

俺にとつて彼女達は妹のような存在。出会ってから数える程にか過ぎしていないが無意識にそう思えた。

「…俺にもこんな時間があったら」

もし両親が亡くなっていなかったら。大好きだった野球もベースも料理も今以上に楽しんで出来ていたかもしれない。

そんなタラレバが頭をよぎってしまう。それについては自分で区切りをつけたはずなのに。

だからこそ、意識の奥底に無理矢理押し込めたほんの僅かな希望が。欲望が。願いが。夢が、自然と口から溢れてしまった。

『…俺にもこんな時間があつたらな』

自然と聞こえてしまった言葉。

練習前に聞こえた一言に練習中も家に帰ってきた今でもそれはあたしの頭に強く残ってた。それはあたし達の様に高校に通つていない海斗が口にした言葉。

理由があつて高校に通えてないことは何となく分かっていた。

それでも、家族の為に頑張つてる海斗は凄いと思った。

あたしとは違うから、あたしは五人でずっと居たかった。だから無理とかやめろつて言葉に猛反発した。

でも海斗はそれを受け入れたんだと思う。自分が苦しい思いをしなくても家族が幸せなら、つて。

それにチラツと見えた表情にも驚いた。いつも見るヘナつとした笑顔でも、最初に会った時の凛々しい顔でもなかった。

何で、何であんたはそんな顔してるの？

何でそんな、今にも壊れそうな顔してるの？

何でそんな、絶望しきつた顔してるの？

もし、あんたがホントに絶望したつて言うならあたしが、あたし達が光になる。

A f t e r g l o w があんたの道標になる。

あたし達五人が見たあの夕日のように。

眩しく照らしてあげる。

く急展開く

「あれお兄、今日早いね」

朝六時。目を擦りながら未来カリビングに入ってきた。我が妹ながらやはり可愛い。

蘭達 After glow の練習を見た次の日。俺は早めに起きていつも未来がやって来てくれる家事をしている。

「すぐ朝メシ出来るから着替えて顔洗ってこい。それと理斗のやつも起こしてくれ」

「ふぁーい」

欠伸をしながらリビングを後にする未来。うんやっぱり可愛い。

妹は正義だな、うん。

「…朝からこれ食えってか?」

目の前にあるのは朝から食べるにしては多すぎるほどの料理たち。

今日は朝練が無いからゆっくりと寝れるはずだったのに姉に起こされてリビングに来ればこれである。

これを作った張本人は隣で正座しながら姉に怒られている。

「朝からこんな量食べるわけないでしょ!こんなに作って残り物はどうする気なの!?!」

「それは弁当にでも入れれば…」

「だとしても多すぎ!!このバカ兄!!」

「バカ兄…すいません…」

未来姉にバカ呼ばわりされて項垂れる兄貴。我が兄ながらアホだ。俺らの為に自分が苦しめばいいと思ってるバカにはいい薬だろ。

兄貴が苦しんでる間、他の誰かも苦しんでるって考えになんて行きつかないのか。

「未来姉、そんな怒んなよ」

「理斗はお兄に甘いよ。怒る時は怒らないと」

「いや、きつきの一言でだいぶダメージ受けてるから。未来姉も本当は嬉しいんだろ？久しぶりに兄貴の飯食べれるから」

「うっ…それはそうだけどさ…」

凶星なのか少し困惑気味の未来姉。うん、やっぱり我が姉ながら可愛い。

「じゃあそれでいいじゃん。兄貴だつて俺らの為にやってくれたんだから。そうだろ兄貴？」

未だに崩れ落ちている兄貴に声をかければ顔をあげた。あ、やつちまったなこれ。目が輝いてやがる。

「そう、そうなんだよ！理斗なら分かってくれるって思ってた！流石は俺の弟！大好き！愛してる！」

「気持ちわりいから離れる、てか座れ」

未だに肩を揺さぶってくる兄貴^{バカ}をとりあえず座らせる。未来姉も溜息を吐きながら席に着いた。

俺も席について三人揃って手を合わせて「いただきます」と言い、目の前の大量の料理を食べ始める。

その中で俺や未来姉が弁当に入れてもらいたいものを言つては兄貴がそれを別皿に少し取っておく。

そんな普通の家庭では当たり前のことのうちでは当たり前じゃなかった。だから、こんな当たり前のことがめっちゃ嬉しかった。

何より朝から未来姉の困った顔が見れたからOKだろう。

「…暇だな」

朝の朝食作りすぎ事件から既に時間は午後三時をまわっていた。

いつも未来が朝にやっていた洗濯や洗い物、更に部屋の掃除までこなし昼飯を食べリビングのソファに横になって早一時間。

特にやることも無く、ただただ横になっていただけでこれだ。い

や、別に寝てた訳じゃなくて、普段から考え事ばかりしてるから何にも考えたくなくなつて。

「とりあえず散歩行こ」

暇つぶしにと携帯と財布だけ持って家を後にした。

家を出てから、少し歩いた。いつも通勤で使ってる道なのに何故か新鮮で。

たまにこういうのもありだな、なんて思いながら歩いていたら近くの公園に目が入ったその時――

「おお、そこにいるのは高校にも通えてない可哀想な海斗じゃねーか」

「…何の用だ、諸星」

見たくもない顔に声をかけられた。

諸星一真、前にファミレスで俺が払えばと言い始めた張本人。

この休暇で出来るだけ会いたくなかった内の一人。

そしてその周りには取り巻きであろう奴らが数人。

「おいおい、そう邪険にすんなよ。俺らは友達だろ？」

「誰がだ、そんな回りくどい言い方せずに言えよ」

「お、流石は元学年トップ。話が早いね、それじゃ金貸してくれよ」

予想通りと言えば予想通りだが…。ツチ、めんどくせえ。

「断ったら？」

「おいおいこの状況をよく見ろよ？お前に残された道は一つだけだぜ？」

ニヤニヤと俺を囲むように動く取り巻き共。残された道？一つだけじゃねえだろ。ホントこういうのは――

「楽だわ」

「あ？」

「お前らみたいな単細胞は楽でいいなって言ったんだクソども」

軽く煽ってやれば能無しのかいつらは眉間に青筋を立てる。おい

おい、こんな軽い挑発でパンク寸前って煽り耐性無すぎだろ。

「もういつペン言ってみろよ？誰が単細胞だって？ああ!？」

「お前以外誰がいんだよ。ああいるな、俺を囲んでる奴らも同類だな」
「調子にのんなや！」

「こんなやつ締めちゃいましょうよ兄貴！」

丁寧に説明してやれば周りの能無し共が騒ぎ始めた。

「おいおい、少しは啖呵切つて殴るくらいやって見せろよ。不良(笑)
なんだろ？」

「…テメエどうなつても知らねえぞ？」

おつと俺としたことが口に出していたらしい。まあどうでもいいか。
「ほら、かかつてこいよ。そこのお前らのリーダーは俺に勝てたこと
ないけどな」

勝てたことがない、それを聞いた瞬間、取り巻き共の視線が一気に
諸星へと向かった。

「つ…！早くこいつをやれ！」

見るからに焦っている。ま、凡そ話を少し大袈裟に話していたんだ
ろう。例えば俺の事。さっきの言葉に対して取り巻き共は驚愕では
なく疑問を上げていた。

つてことはだ、事実と真逆のことを吹いていたんだろう。

「てめえがかかつてこいよ。ホラ吹きさんよ？」

「てめえ…！もう二度とそんな顔出来ないようにしてやるよ!!」

そう言つて殴りかかってくる諸星。右拳が当たる俺の頬に当たり
かけた時――

「お巡りさんこつちです！」

聞き慣れた声が公園内に響いた。この声は…。

「ツちお前らずらかるぞ…！覚えてろよ海斗」

「お前が覚えてられるかだろ駄アホ」

いかにも雑魚らしいセリフを吐いて逃げる諸星達。そして買い物
袋を持った茶髪のショートカットの女の子と赤い髪をした女の子が
こちらに走ってくる。

「大丈夫ですか！海斗さん！」

「何があつたんだ海斗さん！」

はあはあと息を荒くして聞いてくる二人。見る限りとても焦つて

「お前達には関係ないだろ？」

「なっ!? 何それ!？」

「だからこれは俺の問題で巻き込むつもりは無いってこと」

「流石にそれは無理だ。現状を見ちやっただからせつ——」

「お前達に話した所で解決はしないだろ？」

巴ちゃんの言葉を遮った言葉は俺自身でも驚いた。無意識に出ていたのだから。

「そんな…そんな言い方無いです！蘭ちゃんも巴ちゃんも！私達は海斗さんが心配なんです！何でそれを…そんな形で突き放すんですか！」

目尻に涙を浮かべて言ったつぐみちゃんはそのまま走っていつてしまった。

…ああ、またやつちまった。これじゃ昔と何も変わらないじゃないか。

「あ！つぐ待って！」

「…最低だよあんた」

ひまりちゃんはずぐみちゃんの事を追っていき、蘭は睨みつけてから行ってしまった。

「…ホント、最低だな。二人も行けば？俺なんか構ってないで」

「そー言う訳にもいかないだよねー。今のカイくんほっといたら死にそう感じるしー」

カイくん、か…。瑞希にもそう呼ばれてたっけ。今じゃあんまり会わないから聞かないけど懐かしいな。

「…大丈夫だよ、それとごめんね。冷静じゃなかった。だから——」

「ふざけんな！アンタはそうやって何もかも一人で抱え込む気か?! 誰にも頼らずに！死にそうな面して！へなへなした笑顔張りつけて！

…そんなの悲しいじゃん。」

「巴ちゃんが泣くことじゃないよ。これは俺が招いた種だから。俺が悪いんだ。それに俺と君たちはただの知り合いって仲でしょ？なら知らなくていいこともあるんだよ」

怒鳴りながら泣いた巴ちゃんに笑顔を向けながら言う。ああ、ホン

ト汚い奴だよ俺は。

「ねーカイくん。」

あたし達に話してくれない？何があつたのか。あたし達カイくんの事なーにも知らないよ？なのに大丈夫って言われても説得力ないし。だから教えて？」

く照らされた暗雲く

「ねーカイくん。」

あたし達に話してくれない？何があつたのか。あたし達カイくんの事なーにも知らないよ？なのに大丈夫って言われても説得力ないし。だから教えて？」

After glowと衝突した次の日。昨日の公園に来ていた。あの後、モカと巴（呼び捨てでいいと言われたから）と連絡先を交換して謝罪と諸星との関係性を話す場を設けることにしたからだ。

「一発は覚悟しとくかないとな…」

主に蘭から。…一発で済むかな。

「おおくカイくん、来るのはやーい」

「そりゃあ、呼んだ本人が遅れる訳にはいかないからね」

モカを筆頭にこちらにやってくる。気まずそうなひまりちゃんと申し訳なさそうにしているつぐみちゃん。何かを案じている巴。そして――

「何の用。あたし達あんたの為に時間さくほど暇じゃないけど」

お怒りMAXの蘭…蘭様。あれ、蘭の後ろに般若がいるだけ。気のせいだよね？

「昨日悪かった。言い過ぎた」

「それだけの為に呼んだの？…呆れた、あたし帰る」

謝罪も受け取らずに帰ろうとする蘭。それをまあ待て、と止める巴。ありがとう、巴。

「何があつたのか話すよ。何で高校に通ってないのかも含めて。それと――」

つぐみちゃんの前まで移動する。そして深々と頭を下げた。

「昨日はごめん、それとありがとう。つぐみちゃんに言われてやっと気づけた。だからありがとう。泣かせるようなこと言ってごめん、大

人げなかった」

「え?!いや、私も昨日は急にその、ごめんなさい!海斗さんが色々あるのはよくお店で話してくれただけだから…力になりたかっただけなので…」

「ありがとうつぐみちゃん。(俺はそんな君に救われたんだから)」
「…!えへへっ」

自然と頭を撫でてしまっていた。それをつぐみちゃんは少し照れながら、嬉しそうにいてくれた。あとは――

「蘭」

「…なに」

「心配してくれてありがとう」

「…別に。昨日のアンタに腹がたつた、それだけ。でもムカついたから一発は殴らせて」

「それくらいは覚悟してたさ」

素直に右頬を差し出せばいい笑顔でじゃあいくよ、と一言。

みんなが見守る中、公園にパチーン!といい音が響いた。

「にしても痛い…」

右頬にあるもみじを擦りながらボソツと呟く。まさかあそこまで痛いとは思わなかった。先輩の拳骨の方がもっと痛いはずなのに。

あれ、蘭って女の子だよな?

「今失礼なこと考えてたでしょ」

「ギクツ!…なんの事か分からないんだが…」

「あからさまじゃん。何かムカついたから今度左頬にしてい?」

意地悪な笑顔を浮かべながら言う蘭に少し引きながら距離を取っておく。

もうあれはされたくない、と思うほどに痛かった。あのさ、巴も俺を差し出ささないで頼むから。

「それでこれってどこに向かっているんですか?」

「ああ、モカと巴には言っておいたけど一応俺ん家に向かっているよひまりちゃん」

家という単語に蘭の警戒心がMAXに。

「…変なことしないでよね」

「いや、しないから。俺そんな信用ない?」

「ほほほほないな」

「あんまり無いかなく?」

「うう…無いです」

「わ、私は信用してますー!」

四人(つぐみちゃんやんは天使)からの信用の無さ! まあ昨日やらかしてるからしょうがないけどさ!

やっぱりつぐみちゃん天使、異論は認めん!

「わざわざ家に言っただけで話す事なの? さっきの公園でもよかつたんじゃないの?」

「…話すよりも直接見た方が早いこともあるんだよ蘭。…つと着いたここだよ」

玄関を開けながら、どうぞとみんなを入れてリビングまで通す。

今日は未来は買い物、理斗は部活だから誰もいない。

とりあえず飲み物出すから適当に寛いどいて、一言だけ残してキツチンへと向かう。

確か水出しの紅茶があるはず。

ふと目を向ければモカ以外が借りてきた猫のように固まっている。

「そんな緊張しなくてもいいよ。つとみんな紅茶でよかった?」

「え、ああ大丈夫だ」

「わ、私も」

「それにしても大きいですね…」

「まあ父さんが社長だったからね」

「だった?」

蘭は気づいたみたいだ。いやモカもかな?

「それじゃまずは俺は高校に通っていないことについてから話そうか。みんなこっちに来て」

みんなをリビングの隣の部屋に催促する。隣の部屋は和室で和が好きだった父さんの仕事部屋。

今は家族でも使わないようにしてある。その理由は――

「父さん、母さんただいま」

そこには父さんと母さんの遺影があるから。

五人を見れば息を飲んでるのがわかった。それが普通の反応だよな。

「今日は知り合いを連れてきたんだ。みんな女の子だけどいい子で未来みたいにかわらしくて頑張り屋なんだ」

父さんと母さんに五人のことを軽く紹介する。勿論、反応なんてあるわけない。でもそれが俺の日課だから。

今日あったことを話すのが家にあるただ一つのルール。未来や理斗にも話すし、父さんと母さんに話す。

別に異常でもいい、頭がおかしいって言われてもいい。だってそれが家族だから。

「…これが理由だよ。俺には二人の妹と弟がいる。二人を養う為に働いてるんだ」

「でもそれって親戚とかに援助してもらえば良かったんじゃないですか?」

場所は変わりリビング。ひまりちゃんの言う通り。だけどね、そんなこと無かったんだ。みんな、みんな――

「親戚共は父さんの遺産目当ての奴らだけ。助けてくれたのはじいちゃんとかばあちゃんだけだった。でも二人とも歳で住んでも遠いから迷惑になると思ったから俺が負担してるんだ。二人には幸せになってほしいからね」

「海斗さん…アンタってバカなのか?」

「…どういうこと? 巴」

巴の言葉にイラつきを覚える。バカ呼ばわりじゃなくてその真意に。

「アンタが苦しんでる間に他の人が苦しんでないのかって意味だ。アンタがそうやって何もかも抱え込んでる時に妹と弟は心配しないででも思ってるのかって」

「それは…」

もちろん考えたさ。それでもそれが一番だったから。だってあとに産まれてくる妹や弟を護るのが兄貴の役目だろ？

「私ももし、お兄ちゃんがいてそういうことになったら…心配します。もしかしたら私のせいなんじやって思っちゃいます」

「…もし自分がその状況に陥った時、人は本当に真価を問われるんだ。俺は妹と弟を護るために、兄貴として護るためにやってる。それ自体に後悔も何も無いさ。もちろん二人とも、今のつぐみちゃんみたいに考えてると思う。だけどね、兄貴には、男には引き下がれない時つてのがあるんだ。俺にとつてそれが今だつて話なんだ」

「…後悔が無いなんて嘘だよ」

「蘭？」

「だつてあんたこの前、『俺にもこんな時間があれば』つて言ったよね？そういう時点で後悔してるじゃん。もう自分に嘘つくのやめなよ」
「カイくんは色々と溜め込みすぎなのでーす。何かあればモカちゃん達に話してください。力になれなくても話すだけで変わるんだよー？」

「まだ会ったばかりだけど、海斗さんは頑張ってます！頑張りが過ぎてるほどに！だから今くらいはゆつくり休んでもいいんじゃないですか？」

「海斗さんは立派だよ。兄として男としても。同じ兄、姉の立場の人からすればすげえカッコイイよ。でも無理するのがカッコイイ訳じゃないんだよ。それも妹が心配するなら尚更な？」

「みんな海斗さんのことが心配なんです。だから無理しないでください。私も頑張りがすぎちゃって倒れた事があるから…。一人で頑張ることには限界があるんですよ？だから人を頼るんです。もし辛くなったなら私が話を聞きます。私でダメならみんなで聞きます。だから頑張りがすぎないでくださいね？」

優しく俺の手を握ってくれるつぐみちゃん。その笑顔に照らされて。ああ、一年前と同じだ。俺はそんな君の笑顔に照らされたんだ。

自分で気づくべきことに、年下の女の子に言われて気づかされて。そんな当たり前のことを見ないようにして。

頑張ってる自分に酔って、ホントに馬鹿馬鹿しい。未来と理斗に
しっかりと謝らないとな。
ごめんって

意地張ってたって

ホントは情けない兄貴だけど許してくれるかって

「そっか…。俺は頑張りすぎてたのか」

「そうだよ、だから決めた」

「そうだね」

「うん！そうしよう！」

「それしかないな！」

「よーし！私も頑張るぞー！」

「え、えつと…。どういうこと？」

五人が何の話をしてるのか全くわからない。なに、またビンタ食ら
うの？

「あたし達、After glowがあんたのこと照らしてあげる。
もしあんたが絶望しようともあたし達の音楽で救う。もう二度とそ
んな顔させない」

高らかに宣言する蘭、いやAfter glowの面々。

ああ…眩しいな。眩しすぎて視界がぼやけるや。おかしいな、こん
な気持ちになるなんて初めてだ。

とつても暖かくて、気持ちが良くて、安心する。まるで夕日のご
うに優しい光。

だから今なら素直に言える。

偽りの笑みじゃなくて、心の底から思える最高の笑顔を浮かべてな
がら。

「ありがとう。救われたよ」

く届くといいねく

柄にもなく、年下の女の子達に救われてから俺は数年ぶりに涙を流した。

それを彼女たちは暖かく見守ってくれ、更につぐみちゃんは頭を撫でていてくれた。

…今思えば普通に恥ずかしんだが。

そして今回のもうひとつの目的、諸星との関係性。

「ちなみに聞くけど、関係があるのはあそこにいた全員？それとも最後に殴ってきそうだった人？」

「後者だよ蘭。名前は諸星一真、中学が同じだった。——いや、話すなら中学校の話からしようか。それと隠れてないで出ておいで未来」

先程帰ってきたであろう未来がリビングのドアを開けて気まずそうに苦笑いを浮かべながら入ってくる。

「あはは…、お兄が珍しく人呼んでるなーって思ったら女の子だし、泣いてるし。ビックリして入れなかったんだよね」

「別に責めてるわけじゃないんだ。それと未来。ほんとごめんな。俺は自分の事しか考えてなかった。二人が幸せになつてくれればって、それだけ考えてた。未来と理斗が心配してくれてたのにそれを蔑ろにしてた…。だからごめん。頼りなくて、不甲斐ないお兄だけど許してくれないか？」

それを聞いた未来は俯いてしまった。…やっぱり許してはくれないか…。

「…ほんつとごみいちゃんだよ。あたしと理斗がどれだけ心配したと思ってるの…。それを下手つくそな作り笑い浮かべてさ、『俺は大丈夫だから』って…。大丈夫な訳ないじゃん！見てれば分かるよ！お兄がボロボロなの！私達の為に働いてるって！無理してるんだって！分かってたよ！でも…止めても止まらないんですよ？お兄は。だからあたし達はお兄を支えようって決めたの。お兄が何でそんなに頑張るのか聞いた事あるでしょ？その時、お兄は『兄貴ってのは後から

生まれてくる妹と弟を護るために先に生まれんだ』って。

ならさ、あたし達下の子は護ってくれてるお兄ちゃんを支えてあげようって。確かに強がり、意地っ張り、そのくせ、嘘がつけなくて。そんなお兄のことがあたし達は大好きなの。だから支えたい。

だから許すも何も無いよ？お兄が元気で楽しくいてくれるならそれでいい」

胸の前に手を重ねて言う未来は泣いていた。ホントに…ホントに俺はバカだ…。護るなんて大層な事言って何にも護れてなんかいなかった。現に今日の前で未来は泣いてる。もう泣かせないって決めたのに。

——ならお前はどうするべきだ？

誰だお前、いやお前は俺なんだな。

——なんだ、分かってんじやねえか。なら、俺が考えてることもわかるよな？

ああ、当たり前だ。ならお前も俺の考え分かってんだろ？

——ハッ、誰に言ってるんだ。これからは

これからは

俺の周り全員が笑って居られるようにしてやる——！

「ありがとう未来。俺頑張るから。二人の立派なお兄になるから」

「もう十分立派だよお兄ちゃん…！」

泣き続ける未来を俺はそっと抱きしめた。家族として何年もいるはずなのに、初めて自分達の想いを口にできた。

「つと今度こそホントに本題に入ろう。あ、そうだ」

「今度は何…」

蘭が鬱陶しそうに言う。いやさっきのはホントに悪かったけどさ。そんな顔しないで。頼むから。

「飯食ってけよ、時間も時間だし。未来はあれだし…俺が作るか」

時計を見れば既に七時前ではないか。

未来はと言うと部屋に籠もってる。いや、まさか未来と蘭が同じク

ラスで何気に仲良かったと気づいたのは未来が泣いた後。

正気に戻った未来は蘭を見て、「ら、蘭!?!なんで!?!」と慌て始め泣いたことを思い出し、瞬時にその場を後にした。

それも目に見えぬ速さで。気づいた時にはリビングのドアがひとりでに開いており、その場にいた誰もが戦慄した。

「あたしはいいよ」

「アタシも〜」

「あたしも!!」

「アタシも連絡すればいいから大丈夫だ」

「わたしも大丈夫です!」

五人ともOKらしいので早速何を作ろうか。未来が買ってきた買い物袋には何があるかな……つと!なるほど、決まった。

「それよりもさ、料理出来るの?」

「ん?ああ、大抵のものなら作れるよ。流石に未来には負けるけど」

「…全然見えない」

「おい蘭てめえ」

軽口を叩きながら自前のエプロンを着け、手を洗って台所に立つ。

「わ、私も手伝います!」

「え、いいよつぐみちゃん。みんなはお客さんだしゆっくりしてな」

それを聞いたつぐみちゃんはしよんぼりとして、「そうですか…」つて戻って行ったのだが……

「え、どうしたの蘭ちゃん?え、え!?!そ、それは……」

二人でコソコソ話し始めたでありますか。え、何されんの。

再びつぐみちゃんがこちらに来る。それも少し頬を染めて。

「か、海斗さん!そ、その…私が毎日味噌汁作るのダメですか?」

「ガハッ!」

「うわああ、つぐ積極的だねえ〜」

「そんなこと言ってないで海斗さん倒れたぞ!」

「ら、蘭!?!つぐに何言わせてんの!?!」

な、なんだ今のは…!あまりにも可愛すぎる…!セリフとマッチしたかのような上目遣い。赤く染まった頬。そしてセリフ。作者は俺

を殺す気がアア!? (逆に殺さないわけがない)

そして、そのまま後ろへと倒れ俺は後頭部を強く打ちすぎて意識が飛んだ。

「大丈夫か海斗さん!」

「つぐみ、今度はこう言いな」

「蘭ちゃん!」

「つぐみがホントにそう思ってるなら、だけどね」

「——うん!」

「カオスですなあ」

「そんなこと言ってるな!!モカも蘭のこと止めてよ!!」

「とりあえずソファアまで運ぶぞ!何でかホントに意識飛んでる!」

何だ、一体どうなってる…。

さっきのがあまりにも破壊力ありすぎて、昇天しかけた。だが、戻ってきたぞ! I l l b e b a c k !!

ん?そして何だこの後頭部の柔らかさは。今までに感じたことがないこの感触。

ずっとこのままでいたいと思える。それほどに気持ちがいい。

「大丈夫ですか海斗さん?」

うん、まあ大丈夫だよ。つぐみちゃん。それにしても近い、ね…?

「え、何でつぐみちゃんが目の前に?」

「えへへっあなたのつぐみです」

——うん

「我が人生に一片の悔いなし!ガク…」

「か、海斗さん!」

「バカやってないでさっさと起きろバカ兄貴」

そんなコントじみた事をしてるといつの間にか帰ってきていた理斗が。

ん?珍しいなお前が台所に立つなんて。

「どっかのバカクソ兄貴が倒れてっから仕方なくだよ。それに作った

のは簡単なサラダだけ。朝の残り夜は食べるつつたろアホ」

「お前口悪いな！そんな子に育てた覚えはないぞ!」

「そこまで育てられた覚えもねえ。てかいつまで膝枕されてんだクソ野郎」

育てられた覚えもねえ…だと。流石に泣いていいよな？あれなんか目から塩水が。

「ん？それよりも膝枕って…」

ふと見上げればつぐみちゃんの顔が赤く染まっている。

…嘘でしょ？

「蘭ちゃんがやってあげると嬉しいからって…」

「蘭ンンン！」

「騒々しい、うるさい、黙って、野獣」

「何その連続コンボ!?!それに誰が野獣だ!!ある意味ご褒美だけどさ!」

ガバツと起き上がり、元凶へと声を張り上げる。気づけばテーブルの上には俺が朝作りすぎた料理達が並んでいる。

それをつぐみちゃん以外の A f t e r g l o w のメンバーが準備をしていてくれた。

「…つぐみちゃんごめんね。嫌だったでしょ?」

「い、いやそんなことないです!むしろ私の方がご褒美だったとか…」

「ん?最後の方がよく聞こえなかったんだけど。なんて言ったの?」

「な、なんでもないです!それよりも食べましょ!」

そう言つてソファアから立ち上がり、テーブルへと向かうが。

「うん、椅子足りないね」

そう、家は元々5人家族だったから椅子は5つしかない。テーブルその大ききで8人も座れるスペースはない。

「俺らはそつちでいいだろ。テキトーに取り分けて持ってけば」

「ま、それが妥当だな。とりあえず理斗は未来を連れてきてくれ」
「おう」

足早に理斗は出ていった。未来の事が大好きな理斗の事だ、すぐにも連れくるだろ。

「膝枕ってどういうことお兄?！」

うん、あまりにも早い、早すぎる。

「どういうことも何も気づいたら、な」

「…まさかお兄があたしの友達の事脅して、そんなことさせれるなんて。まさか…いつも帰り遅いのは変なことしてるから?」

「おいちよつと待て。なんで俺がやらせたみたいなんだよ。理斗お前どうやって説明したんだコラ」

「フツ。簡単なことだよ。膝枕されてる↓あ、事案後かな↓報告。それだけだけど?」

「お前のそれはそれだけですまねえわ!!何だ事案後って!?それに俺倒れたの!!」

「え?俺、蘭から事案後って聞いたけど」

それを聞いて蘭を見れば――

「?」

「何でえお前がそんな不思議そうな顔してんだあ!?どう考えてもお前が元凶じゃねえか!」

「何言ってるの?あれはあんたが勝手に倒れただけじゃん。それもつぐみの事可愛いとか言いながら」

「言ってるねええ!!確かに可愛いかったけど!思いはしたけど言ってるねえ!!」

ゼエゼエと息を荒くしながらこの悪魔と対峙する。なんだコイツ…初めてあつた時よりも棘が鋭くないですか。

「え?カイクンあたしにも言ってくれたじゃん」

「「はああ?!」」

綾部家全員揃ってビックリだよ。何それ。そんなことした事ないけど。

「可愛いって〜言ってくれて〜。そのまま〜抱きしめてくれて〜ホー」

「ンなことしてねええ!!何だそれ!?誰かと勘違いしすぎたろモカ!!」

…俺いつからこんな扱いなんだろう。

「それじゃ、ちよつと行つてくるね。未来、先に食べてていいから」

「はいはい」

蘭と玄関へと向かう。どうやら外で話したいらしい。それとみんなの誤解はしつかりと解けたらしい。

にしても話とは何だろうか。思い当たる節しかない。

「アンタに聞きたいのは二つ。一つはあの不良との関係。それはこの後みんなと聞くからいい。もう一つは――」

つぐみの事、どう想ってるのか」

…やっぱりそれか。

「まあだと思つてたよ。何となく察しはついてた」

「…アンタ、つぐみの気持ちに気づいてたの?」

「薄々な。だけどそんなことは無いって思つてたけどさっきので確信になつた」

心底驚いている蘭。改めるとこいつのこんな表情は初めて見るな。

「アンタつて変なところで鋭いよね。何、昔からなの?」

「まあな。人の視線にはかなり敏感なんだよ」

「お父さんが社長だったから、でしょ?」

「流石だな、その通り。つてこんな話よりも本題だ。お前が聞きたいのはこういう事じゃないんだろ?」

小さく蘭は頷いた。そして意を決した様な顔つきに変わった。

そして放たれた。

「アンタはつぐみの事が好きなの?」

くお泊まり会く前編

「あんたはつぐみのことが好きなの？」

蘭に言われたその言葉が脳内で回り続ける。好きかどうかで言われたら好きなのだろう。だが、それが恋愛感情なのか分からない。だって彼女は俺にとって光だったから。初めてあつた時に彼女の笑顔を見て救われた。だからなのか少し、いやかなり特別に接してると思う。だからこの気持ちは――

「――好きなんだろうな」

そう言いながら空に映る一つの星を見る。その答えに蘭はそう、とだけ答え同じように空を見た。残念ながら星空のカーテン、なんて言うほど星は出ていない。だけどそんな中でも光る一番星が一番好きだ。特に理由はないけど、好きだと思えた。

「――俺はさ」

「うん」

「――本当は高校に行きたかったんだ」

「うん」

「――もっと遊びたかった」

「うん」

「――誰かを好きになって、バカみたいに騒げる親友といたかった」

「うん」

「――野球も続けられたし、ベースもやりたかった。バンドも組んでみたかった」

「うん」

「――決して不幸とは言わないけど辛いな」

蘭はそこまでは黙って聞いててくれた。俺の誰にも話せない愚痴を。溜め込んでいた願望を聞いてくれた。そんなもの、もう叶わないうって分かっている。だけどさ、俺だって人間だからさ。こんなになるって分かっていたなら、こんな道歩きたくなかった。

――不幸では無いけど辛い。それが俺を指すいい言葉だろう。現状に文句はない。これは俺が選んだ道だから。でも愚痴くらいは

言ってもいいはずさ。

「あんたはさ——」

そんな自問自答を繰り返してた時、蘭が俺の目を見て笑ってきた。「——それでも歩き続けた。普通なら止まって投げ出してるものを。あんたは成し遂げ続けている。だから、そんな顔しないでよ。無責任で言われるかもしれない。それでも言わせて——」

”お疲れ様”

その一言に心の底から込み上げてくるものがある。

目の前の彼女には適わない、なんて思ったら自然と笑いが零れた。蘭もそれを見てクスクスと笑っている。今日はホントに救われ続けているな。

「それじゃ戻ろ。早くしないとモカが全部食べちゃう」

目の前にいる彼女に今なら告げられる。心の底から本心を言える。

——ありがとう、救われたよ

それが蘭に聞こえたかは分からない。もうこんな自己満足だ。聞こえてたら幸いで聞こえてなかったらそれまでの話だ。彼女の事だから顔を赤くしながら、否定するかも知れない。そんな事を考えていたら笑いが出る。

——父さん、母さん。俺は今幸せです

「唐突ですがお泊まり会を所望します!!」

「兄貴任せ……逃がすか!」

いつもの未来の唐突の爆弾から逃げようとする愚弟の首元を掴む。

”巻き込まれるならお前もだ”。

”生贄は兄貴で十分だろ!?”

”理斗ギルテイ”

そんなやり取りを視線でする。こいつ、兄貴を生贄つて。お兄ちゃんそんな子に育てた覚えありません!

「え、急に迷惑でしょ」

「大丈夫!家でやるから!ほらほら!荷物もあるわけだし一旦帰つてね!」

ゴリ押しとはまさにこの事。めちやくちやじゃねーか。道理もクソもないよ。

「え、でも…」

「大丈夫!」

何を根拠してんだ。流石のゴリ押しに巴もひまりちゃんはドン引きしてんだろ。つぐみちゃんは苦笑い浮かべてるし。

「ちなみにまだ親に言っていないのは蘭だけだよ?」

「待つて。お願いだから待つて。話が見えないんだけど」

おお動揺してる。こんなのレアかもしれん。止めないで見てよ(放棄)

「さつきそう言う話してたんだけど蘭いなかったから…」

蘭にジト目で見られながらも答えるひまりちゃん。なんか可哀想。

「ほーら蘭も早く連絡しなよ?しないとか」

「しないとか?」

理斗と声が被る。なんだ、お前も気になんのか。

「蘭の昔の写真、みんなに見てもらおうよ?」

恐らくみんなとは俺たち綾部家のことを指しているのだろう。

蘭の頬が引きつっている。そんなに見られたくないのか。

「モカ。本気で、言ってる?」

「モカちゃんは本気だぞ」

両手を上げて威嚇?みたいなポーズを取る。いや可愛いだけだろそれ。

「えへへ。カイくんに褒められた」

「ギリッ…」

「うわ怖」

物凄く蘭に睨まれた。てかモカよ、人の心を勝手に読むな。

「まあ、蘭ママには伝えてあるんだけどね」

「えっ?」

「うわっ外堀から埋めってる。性格悪」

「理斗それは言っちゃいけないやつだ」

巴も同意してるし。見てみるあの笑顔。あれ、絶対裏になんかあるって。

「そもそも何でモカが、母さんの連絡先知ってるの?」

「ふっふっふ。それはね、きぎよくひみつ」

あ、これ蘭の負けだわ。こういう奴ってマジでポンポン色んなもん出してくるからね。

「……もういい、わかった」

トドメに携帯を見て折れた。恐らくお母さんが何か送ってきたのだろう。ドンマイ蘭。

「それじゃアタシ達は一回帰るか。一時間後くらいにまた来るから!」

じゃ!と片手を上げて帰っていくAfter glow。てか巴は男前すぎね?色々。

んじゃあまあとつと片付けてゆっくりしよ。まだ休みは残ってるし。

「そう、それじゃ気をつけて行ってきなさいね。お父さんにはお母さんの方から言っておくからね」

「うん、ありがとうお母さん!」

「でも、まさかつぐみに彼氏がいたなんてね」

「か、か、彼氏!?そんなんじゃないよ!?!」

お母さんに友達の所に泊まりに行くと言われた時に言われた。その

時の私は顔を真っ赤にしていたと思う。それを見てお母さんは更にクスと笑った。

「じゃあまだつぐみの片想い、なのね」

「ううう、お母さんのバカ…」

片想い。これが恋なのかはまだ私も分かっていない。海斗さんと話していると心臓が高鳴ったり、笑顔を見るとドキッとしてしまう自分は確かにいる。

でも、さっきの蘭ちゃんとのやり取りを見ていたらモヤモヤした。もしかして私嫉妬、してたのかな。もしそうだとしたら私、最低だね…。大切な幼馴染に嫉妬、してるんだもん。

「つぐみ」

一人、思考に陥っていた時お母さんに声をかけられた。

「どうし…うわあ」

振り返ってみれば私はお母さんに抱きしめられていた。ああやっぱり暖かいな。

「つぐみが今どんな気持ちなのかは分かるよ。お母さんもそうだったから。でもね、それは悪いことじゃないの。つぐみがしたいようにすればいいのよ。もし、それが大切な幼馴染を傷つけてしまうことなら正直に話してみればいいの。だから何も心配は要らないわ」

「——うん！ありがとうお母さん。えへへ、お母さんってやっぱり暖かいね」

お母さんに抱き締めながら、私は思った。

まだまだお母さんには適わないなって。

「大切な幼馴染だからこそ話し合うのよ。お母さんはそれが出来なかったから…。でもつぐみなら大丈夫そうね」

「悪いんだけど手伝ってくれない？」

「勿論よアナタ」

「機嫌いいけど何かあったかい？」

「そうね。娘の成長が嬉しい、かしら」

「えっ。それ僕にも詳しく聞かせてよ」

「ええ、勿論よ」

くお泊まり会 後編（と言いなながらも過去編に入つてくスタイル）く

After glowが一度帰ってから一時間。ちようど約束の時間である。

あれから俺は、部屋の掃除、食器の片づけを一家総動員で行った。ついでに使っていなかった部屋の掃除も含めて。

そんなこんなで一時間が経ってしまい、未来と理斗は疲れ切った表情でソファーに座っている。俺はというと――

「何で…兄貴は疲れてないんだよ…」

「お兄だからしょうかないよ…」

「どういう意味だこら」

「いや、あんだだけアホみたいに片付けしてしまいいにはベースの手入れまでしてんだぞ。超人すぎるわ」

ふむ、そんなこと言うが俺だって見た目の割に疲れてるんだ。まあ普段の仕事と比べたら大したことないが。

「だから超人って言ってるんだろが…」

弟よ、そんなに睨むな。居心地が悪いだろう。それにしても、久しぶりだな。こうして真面目にベースの手入れするのは。触る暇さえ無いくらいに余裕がなかったんだろうな。ほんとどうしようもないな。

久々に、弾いてみるか。弾く曲は何がいいかな。

「お兄。弾くならあれがいいな」

「あれ以外は許さねえ」

ハイハイ、わかりましたよ。そんじやご期待に沿って。

「ひまりが遅いから少し遅れそうじゃん」

「ううう……。ごめんてば！ちよつとお布団に入ったら……」

「ひーちゃん、それは流石のモカちゃんでもしなかった行為だよ〜？」

「まあまあ、ひまりは元々こういうもんなんだから」

「ううう……。つーぐー！みんながいじめて来るよー！」

「ハハハ……。でもひまりちゃんの気持ちわかるよ。お布団に入ると気持ちいもんね」

未来の家に向かう途中、合流してから向かうことにした。ひまりが時間に少し遅れたけど、幸い未来の家はそこまで遠くなかった。寧ろご近所さんだった。

……なんで今まで見たことすらなかったんだろう。いや、あたしもそこまで他人を気にすることが出来るくらいに追い込まれていたんだろう。家のことに囚われて。今では父さんとの仲も前よりは良くなった、はず。

……前とあんま変わらない気がしてあれだけど。でも確実に前よりは話すことは多くなった。簡単な会話だけど、何よりそれがう、嬉しかったりもする。だけど、毎回ライブのたびに差し入れは入らない。ひまりが気に入って、「今日は何持ってきてくれるかな!？」なんて言う始末。

まあ不器用だから仕方ないよね。あたしも父さんも。

「蘭ちゃん？どうしたの？」

「ううん、何でもない。それよりも何か聞こえない？」

「言われてみれば確かに……」

「これベースだよな？誰が弾いてるんだろう？すごく上手じゃない

？」

「うくん、これってさく海くんの家のほうから聞こえない？」

モカの一言にまさかと思った。もう家は目と鼻の先だ。それにあいつがベースをやっていたのは知っている。だからもしかしたらー

「蘭!？」

「どうしたの蘭!？」

「蘭ちゃん!？」

ひまり達が驚いているが気にせず走り出した。なんで走り出しかなんて分からない。けど急いであいつの所へ行かなくちやいけないような気がした。

勘、とでも言えばいいのかな。悲しそうに弾いてる姿がなぜが連想できた。

・別にあいつの事は好きではない。自己犠牲が酷い馬鹿な奴、と思っていた。けどあいつにも抱えるものがあつた。それを今日支えようって言ったばかり。あいつにそんな顔をさせないって決めればかりなのだ。

だから――

「海斗!!」

未来の家のドアを思いついきり開ける。鍵がかかっていなくて良かった、と思いつつリビングへと入る。

やはりそこにいた。悲しそうな顔を浮かべた――

「どうした蘭?そんな慌てて」

悲しそうな顔を。

「おーい?」

悲しそ

「蘭お嬢?どしどしぐべっ!？」

「あっ」

気づいた時にはあたしは海斗のことを殴っていた。無駄に心配させたこいつが悪い。あたしは悪くない。

「何これ」

「アタシに聞かれても。」
もしかしくなくてもこれは詰んだってやつだね。

「俺が心配で急いで来てみればそんなこと無かったから殴った、と。
何がどうなって殴るんだよ」
殴られた後、ゾロゾロと来た After glow をとりあえず座
らせ蘭に事情聴取した。結論からいえばこの子は「俺が心配で急いで
きたのにのほほんとして腹が立ったからつい」らしい。

「いやお前理不尽すぎるだろ。」

「ほんとにごめん」

「そして来てからずっとこれだ。罪悪感からなのかシユンとしてしまっている。」

「はあ、俺はなんか複雑だな。嬉しいけど申し訳ないって言うか。いやどつちだよって話だけど。」

「とりあえず分かった。蘭」

名前を呼ばれただけで肩がビクツ！とした。お前ただけびっくりしてんねん。

「心配してくれてありがとうな」

「え？」

「心配してくれて急いで来たんだろ？ならありがとう、があってる気がするんだけど？」

「あんたは怒って、ないの？」

「怒る？ははっ、面白いこと言うな。」

「怒る理由がないだろ。なに、蘭は怒られたいの？」

「いや、そういう訳じゃなくて、あたし、あんたのこと殴ったし。」
「お前のヘナチョコパンチじゃ全く効かないよ。心配してくれてありがとう。でも心配すんなくて、お前の、お前らのおかげで大丈夫だ」

「そう言いながら蘭の頭を撫でる。いつもツンケンしてるけどこの子は仲間想いの優しい子だ。それを怒るなんて筋違いいいところだ。」

それにしても蘭の頭、撫でがいがあるな。癖になりそう。
「バカ。あたしも殴って、ごめん」

蘭がデレただと

うわああああああ!!!何この子、可愛すぎでしょ。最初のバカ。可愛いかよ!!!

「海くんも蘭のデレにやられてますな」

「まああれはやばいからな」

「蘭ちゃんいいなあ」

「つぐ何か言った？」

「ええ!?な、なんでもないよ!」

「俺知らねえ」

「お姉ちゃん命令。逃げずにこの場をどうにかしなさい弟よ」

「だああああ!!それは卑怯だぞ未来姉!」

なんだこれカオスカよ。とりあえずみんな笑顔ならいっか(現実逃避)

その後、事態を理斗が捨て身の一発芸で収集が着いた。そのあとのあいつはモカに弄られまくってたけど。

みんな風呂も入ったし、そろそろいいだろう。風呂のシーンだと? そんなもん無い!今ここで語ってみろ、この場にいる女性陣からボコボコにされるわ。もちろん理斗も巻き込むけど。

いや話さないから、話さないから睨むな蘭。

ちなみにだがみんなパジャマである。一言で言わせてもらおう。

「みんな可愛いです。ごちそうさまです」

特につぐみちゃんのパジャマが個人的にグツとききます。薄めのオレンジを基調としたひまわりの絵が入ってる。女の子らしいしひまわりのような笑顔を向けるつぐみちゃんにピッタリだね。

「〜〜！」

「あ、つぐがオーバーヒートした」

「変態、クズ、ろくでなし！」

「ぐべらっ！」

「止めなくていいの〜？」

「ありやあ兄貴の自業自得だ。なんならモカも殴ってきていんだぞ？」

「ふっふっふ。アタシはそういうのは分かる女の子だから許してあげるのだ〜」

「要するに男として見てねえってことだろ」

「そうとも言う〜」

あの、その二人。いや誰でもいんで助けてください。これ以上は
流石に死ぬ
。 。

「ふいんなひとふあんらくひたひほろほろふおんがいにふあいろ」

「何言ってるか全然分かんない。真面目にやって」

いやこれお前のせいだからね？顔面ボコボコなの君のパンチのせいだからね？分かってて言ってる？

あ、はい真面目にやります。そんな睨むな。べ、別にビビってねーし！

「諸星一真。あの場にいた不良達の頭的存在だ。まああれは何かとあれば俺に突つかかって来てた。長くなりそうだからコーヒでも淹れよう。」

——これは俺の中学三年間の全てだ」

俺は別にあいつの事は好きではなかった。だからといって嫌いでもなかった。普段は無駄に絡んでくるアホなヤツ位にしか思ってたな

かった。

俺だつて人間だ。許せることとそうじゃないものがある。でもあいつはその許せないことの一線を嘲笑うかのように超えた来たんだ。「お前の親、アホみたいな死に方してみたみてえだな。ざまあwwww」その一言が原因だった。別にあいつに何かをしたわけでもなんでもない。唐突に言われたのだ。周りの取り巻き達もそれには流石に戸惑っていた。そこまで言う必要ないだろう?と。

だけどそれに対してもあいつは

「結婚記念日に交通事故で死ぬとかアホすぎんのが事実だろ。それもその事故、崖に突っ込んでそのまま落ちたって話だ。無様極まりすぎんだろww」

「ちよつとそれは言いすぎでしょ!あんたに海くんの今の気持ちがかかるの!?!」

「ああ分からねえな。分からねえよ、なんせ俺の親は未だに生きてるしそんな無様な死に方してねえからな。他人黙つとけよ委員長」

真つ先に瑞希が反論したけどそんなものどこ吹く風だったのは今でも覚えてる。それに対して何かがこみ上がってきた。ああ、これは怒りだつてすぐに分かった。今までに感じたことがない程の怒り。お前に何がわかる。俺の何がわかるんだよ。

「いい加減その汚え口開くな」

「なんだ、怒ったのか?普段からクールぶってるから今回もいつもと同じだと思つたぜ。それで何が言いたい?反論は聞いてやるよ」

「聞こえなかつたのか?その口を開くなつて言つたんだ。元の知能も猿並みだから分からねえのか?」

「へえー、まだそんな口が聞けるつた流石だな。流石は学年トップ様だなあ?猿並みの知能の俺とは違うねえ」

「なら分かるように言つてやる。二度と俺の前でその事を口に出すな落ちこぼれ」

落ちこぼれ、その一言に諸星が反応するのは目に見えていた。俺らしくもないって今でなら分かる。それほどにあいつに怒りを抱いていたのだ。

「誰が落ちこぼれだ？ああ!?調子にのんなよ偽善者が」

「調子にのってんのはテメエだろうが。いい加減今の自分の状況分かれよ。これはお前へのせめての情けだ」

周りを見ればどっちが悪者なんて火を見るように明らかだった。それが面白くない諸星はそのまま教室を後にした。だが俺にはしつかりと聞こえた。あいつは出て行く際、口角を上げてこう言った。

『周りのヤツに気をつかえよ偽善者さん』

く憎しみとはく

両親が事故にあつてから周りのヤツらの反応が変わつた。憐れむような目や心底どうでもいいはずなのに慰めてきたり。その言葉の真意はもはやどうでも良かった。人つてのは信じられるもんじやないとすら思えてた。所詮周りの人は当事者ではなく他人だ。だから簡単にそんなことを言えるのだ。その言葉ですら俺達がどれだけ苦しんだか分かるはずがないのに。

母方の祖父母はすでに亡くなつていたから父方の方がよく助けてくれた。家はかなり遠かつたから、こっちで寝泊まりすることが多かった。それでも、二人とも足腰が悪かつたし、祖父さんはがんを患つていた。今は病院に入院しているけど、それでもあの頃はすごく幸せだつたつて祖母さんから電話でよく聞くんだ。

それでも神様つてのはものすごく残酷だと思う。丁度中学二年生の夏。羽丘で老人を狙う事件が多発してたんだ。みんなもよく覚えてると思う。ひつたくりで済めば良かった。けど、被害者の方たちは全員がかなりの暴行を加えられた。それに祖母さんが被害にあつたんだ。これはその時の、最低最悪の話だ。

—————

夏の夕方。羽丘にあるとある病院。その一室に備え付けの椅子に座る学ランを着た一人の少年。その前のベットにいるのは一人のおばあさん。二人は楽しく話をして、笑つたりしている。周りの病人たちもそれを見て微笑ましくしている。だが気になるのはおばあさんの右腕と頭に巻かれた包帯だ。

最近羽丘では、老人狩りが頻発に起きていた。彼女もその被害者だ。彼女の場合は襲われたときに犯人に抵抗し、一人を捕まえたのだが後ろから現れたもう一人に頭を殴られ、更には金も取られ右腕も折

られたのだ。

「祖母さん、ケガの具合はどうだ？」

「見ての通りさ。別にあんたが心配することじゃないよ。あんたは自分のやりたいことやんな。大会も近いんだし。エースなんだ、しっかり気張りな」

「…ありがとう。そろそろ帰るよ、夕飯作らなくちゃ」

「本当は、あんたに負担かけるつもりなかったんだけど、すまないね」「いいんだ、俺かやりたくてやってるんだ。気にすることねえよ」

「…ほら早く帰りな。やることあるだろ」

「ああ、また来るよ。じゃあな祖母さん」

「今度はみんなで来な」

そう言つて、病室を後にした少年の背中を寂しそうに見つめる祖母。その目には昨年亡くなった自分の息子と孫の背中を重ねてしまった。

「…雅人。家族つてのはどこまでも似るもんだね。あんたと同じように嘘つくときにぎこちなく笑うなんて」

「ただいまー」

「おかえりお兄！」

家の玄関を開ければ、未来が走ってこちらに向かってくる。あいつは俺が中学卒業まで用事が無ければこうやって出迎えてくれていた。今ではあんまり無いけど。

「走ると危ないだろ？すぐに夕飯作るから風呂入ってきちやえ。それと理斗も呼んできて。多分まだ庭でトレーニングしてるだろうから」「分かった！」

俺と理斗は野球部に所属してた。俺は高校に行つてないからだけど、あいつは高校でも野球を続けている。今でなんか一年生エースだとか。流石は俺の弟だ。

「…まあそれでも俺と比べられるのは嫌だろうな」

自分で言うのもあれだけど恐らく俺は天才なんて呼ばれる部類の人間なんだろう。それは野球に限った話だけじゃなくて色んな分野でもそうだ。見たり聞いたりしたただけで出来てしまうのだ。別にそれを自慢する気はサラサラないし、言ってしまうえば器用貧乏なだけだからな。

それでもできる兄と比べられるのは弟として、一人の男として嫌な部分があるだろう。誰も綾部理斗、ではなく綾部海斗の弟、としてしか見ていないからだろうか。兄貴としては複雑なものだ。この時の理斗とはかなり仲が悪かったから尚更だ。

「つと今日は何作るかな〜?」

荷物を置いて手を洗ってから冷蔵庫の中を覗いてあるもので夕飯を作っていく。多分作ってる内に未来が理斗の事を引つ張つても風呂に連れていくだろう。それまでは何も考えずに料理を作っていればいいさ。

「ほーら!一緒に入るよ!」

「離せよクソ姉貴!この歳にもなつて一緒に入るとかねえから!」

「誰がクソ姉貴だつて!?よーし分かった!無理にでも入るいや入れてみせる!お姉ちゃん本気出すからね!」

「んな事で本気なんか出すんじや… つて力強えな!このゴリラ!」

「誰がゴリラだ!麗しき乙女に向かって!」

…
いつも通りと言えはいつも通りだな。はあ。気にせずにいよう。

「服脱がすんじやねえ!!自分で出来るわ!!」

「お姉ちゃんにどれだけ成長したか見せてご覧!!」

「どこ触つてんだ姉貴!?!ちよ、そこは…!」

……………

「何して「何しとるんじやあ馬鹿ガキどもお!!」」

「「え?」」

うわああ起きてきたよ。今この場で一番めんどくさいのが。

「さつきから聞いてれば!焦れたいんじや!何がちよ、そこは…」

じゃ!!ヤルならヤレ!!だけど子供は…「お前が黙れ老いぼれ」

突如現れた老いぼれに拳骨を落とす。それを素直に受けた老いぼれは頭を抱えてその場にうずくまった。

「何するんじや馬鹿ガキその一!」

「誰が馬鹿ガキその一だ。唐突に風呂場に特攻かけるからだろうが。それに二人もふざけてないでさっさと入れ」

未来は潔く返事をしたが、理斗は舌打ちしてそっぽを向いた。ったく、反抗期にも程があるだろう。

「孫の成長を見るのもおじいちゃんの役目じゃ!そうじゃ!未来一緒にお風呂入ろー!」

未だに特攻をかける老いぼれに未来がトドメを刺した。

「うーん… おじいちゃんとはやだ!」

「ガーン… じよ冗談だよね?未来?未来ちゃん?」

「お前はこつちだ爺さん」

未来にトドメを刺され、フリーズしている爺さんの首根っこを掴んでリビングへと連れていく。あーこりやあ当分ダメだな。シヨックで遂には譫言まで言い、笑い始めたわ。

「はあ… うちには変なのしかいねえのかよ」

そんな俺の小言は料理をする音に消えていった。

「いやあ悪いね後輩くん。俺らちよつとお金無いから貸してほしいんだ。なあいいだろ?それに貸さなかったらどうなるか分からねえが。なあ困ってる時はお互い様だろ?」

「そ、そんなあ…。ぼ、僕お金なんて持つてないです。だから貸せないです」

昼休みの学校の屋上。普段ここは立ち入り禁止なのだがそこに人影が複数あった。

屋上のフェンスに一人を追い込み、その周りを囲んでいた。

「おいおい嘘はいけねえな？お前が金持ってるのは知ってた。大人しく出せよ、ほら早く」

「こ、このお金は亡くなったお母さんの供え物を買うお金なんです。だから…貸せません！ごめんなさい！」

「なら、どうなるかも分かってるよなあ？後輩」

ニタニタと笑いながら右手を振り上げた。後輩もそれを覚悟して目を瞑った。だがいつまで経っても来るべきはずの衝撃が来ない。

・恐る恐る目を開くとそこには――

「いい加減にしろよお前。自分がどれだけ最低なことしてるか分かかってんのか？」

囲まれていたはずなのにそれを強引に押しつけて、殴ってきた先輩の右腕を掴んでいる一人の先輩がいた。

・少年は掴まれている腕を振り払い、語った。

「おいおい。何か勘違いしてないか？俺はただ金貸してくれて頼んでただけだぜ？それをなんで部外者であるお前が拒むんだ海斗？」
「よくそんな嘘がつけたな諸星。誰がどう見てもお前が殴りかかってくるようにしか見えなかったが？まあそれでもその嘘を突き通すんならこっちにも手がある」

海斗は後輩の前に立った。それはまるで護るかのよう。後輩はその背中が身長差があると言えどとても、とても大きく見えて、カツコイイと思ってしまった。

「へえ、どんな手があるのか興味があるな。教えてくれよ不幸な偽善者さんよ？」

「今の騒動、ビデオ通話を繋げて先生に見てもらってる。既にお前らは詰んでんだよ。それにな、俺をどうこう言うのは構わねえが、他の生徒に悪意をぶつけるのはやめろ。反吐が出る。悪いけどお前はヤケになって喰つかかかってきてるが、俺はお前に対して一ミリも興味がないねえんだ。俺とお前が対等だとも思ってたのか？そんな訳がないだろ。お前はただの井の中の蛙だよ、諸星」

ニヤニヤと笑っていた諸星以外の連中は海斗が告げた真実に慌てふためき始めた。だが、諸星だけは違った。

彼だけは肩を震わせ、怒りの形相を浮かべて海斗を睨んでいた。
'、先行にこれが見られているなんざ関係ねえ……！こいつはここで
を殺す。'

■明確な殺意を持って。

「誰が蛙だ？ナメてんじゃねえぞ!?俺はテメエのことが気に食わな
かつたんだよ！いつも自分が上かのように見下ろしやがって！憐れ
むような目が！俺は気に入らなかつた！仕舞いにはヒーローのつも
りか!?ああ、ほんとお前みたいに人生イージーモードのやつは考える
ことが違うな!?自分のことよりも他人優先かこの偽善者が!!」

一息に告げた諸星はそのまま海斗に殴りかかった。それを聞き、出
した答えは――

「それが後輩から金を捐^{いび}斐^びつて、悪意ぶつけていい言い訳になるわけ
ねえだろ!!」

真っ向からの否定だった。

「その後、教師が駆けつけて諸星等は謹慎と内申点の減点。その他の
雑用だったりなんだったりをやらされてた。だがまあ、あいつの憎
悪、憎しみはそんなに軽いモンじゃなかつたんだ」

「何があつたんですか?」

■大方因縁らしき話をした後、つぐみちゃんが心配そうに声をかけて
くれた。

「婆さんが老人狩りにあつたって話しただろ?今度はそのターゲット
が未来に変わったんだ」

「」「えっ……」

五人の声が重なる。それに僅かに震えている。それもそうだ、友達

が既に巻き込まれていたんだから。

未来もあの時のことを思い出してか僅かに震えている。……やつぱり話すべきでは無い、か。

「話して、いいよお兄。まだあの時のことは怖いけど、みんなに被害がいくのはもつとやだから」

蘭が未来の手を握ってくれているおかげなのか。明確な、強い意志を目に宿しながらそう告げる未来の覚悟に俺も折れた。

「分かった。ここからは時間が少し飛ぶ。具体的には夏休みの、今と同じくらいの時期だな。丁度俺の夏の大会、決勝が終わった後のことだ」

「はっはっはっ。どこに居るんだ。」

時刻は既に夜の七時を回っていた。俺と理斗は先程決勝戦が終わって帰ってきたのだ。帰ろうとしたその時、瑞稀から電話がかかってきた。

『未来ちゃんが攫われた!』

その一言を聞いてすぐさま駆け出した。理斗の静止も振り切り、ただただ闇雲に怪しい場所を探していた。丁度その時だった。目の前に不良共が団体で現れたのだ。

諸星はこの頃から羽丘の不良共のトップだったのだ。最低限の情報しかない中で俺は一つの答えに至った。

「悪いが居場所を吐いてもらう」

「ああ? テメエの目は腐ってんのかあ? この数相手に勝てると思っがア!?!」

「ごちやごちやうるせえ。妹のいる場所を教えりや何もしねえよ」

「調子にのんなよ テメエ!! お前ら、フクロにしてやれ!!」

コイツらをボコして居場所を吐かせる。それが当時、俺が出した答えだった。

「やっと見つけたぞ諸星」

不良達を叩きのめして居場所を吐かせ、たどり着いた場所は羽丘で唯一海側にある廃倉庫。そこに諸星とロープと猿ぐつわで身動きが取れない未来がいた。

「随分と遅かったじゃねえか偽善者さんよお？妹よりも玉遊びの方が大事だったか？ギャハハハハ！」

「未来を離せ、妹は関係ないだろ！」

「関係？関係は大いにあるさア。お前の妹ならば尚更なあ」

ニタアと笑い懐からあるものを出した。それは――

「っ！やめろ！」

ナイフだった。駆け出したが間に合うはずもなく、未来の左肩にナイフが突き立てられた。痛みと恐怖でいっぱいのはずなのに未来は泣きながらも目で訴えてきた。

； あたしは大丈夫だから逃げて、お兄；

それを見て俺の中で何かがキレた。

「うわああっ!!諸星いいいい!!!」

「いいねえ！そうだよその顔だ！お前のその絶望した顔が見たかった!!もつとだ！もつと見せろよお前の絶望をよ!!」

「てめえだけは許さねえぞ！俺の大切な家族もんに手を出してんじゃねえぞお!!」

俺と諸星の憎しみのぶつけ合いが始まった。

く灯台の光く

「その後、瑞稀が連絡した警察が到着して諸星はそのまま拘束されて連行され、未来はすぐに病院に搬送され、俺は事情聴取で同じく連行された。…これが事の結末。俺は嚴重注意で済んだが、諸星はそのまま逮捕された。はず、だったんだけどなあ…」

事の結末をみんなに話したがやはりというとか、みんな言葉を失っていた。その中で一人だけは違かった。

「おい——」

一人後ろで聞いてた理斗が立ち上がってこちらに向かってくる。顔を上げた瞬間に思いもよらなかつた衝撃に座つてたソファアールから勢いよく落ちた。つぐみちゃんがすぐに駆け寄ってくれたが、唐突に起きた出来事にみんなが驚いていた。蘭は立ちあがったが理斗に睨みつけられ、固まっていた。

「海斗さん！」

「ちよつと！理斗何して…！」

「お前は黙つてろ、蘭。これは俺たち家族の問題だ」

「だとしてもいきなり殴るなんて、あんたおかしいよ！」

「おかしいのはこいつだ。今の話、俺は初耳だ。俺もその場において何が起きていたのにも関わらずだ。それに俺が聞いてたのは交通事故で入院してらつて話だ。どういふことか説明しろ」

俺のことを指さしながら言う理斗に自業自得だなつて思いながら悪かつた、と一言謝つた。だが逆にそれが理斗の逆鱗に触れてしまった。

「謝つてほしいわけじゃねんだよ!!俺に説明しなかつた訳を言えつてんだろ!!」

「お、おい！理斗落ち着け！」

「そうだよ！理斗君落ち着いて！今喧嘩したつて何にもならないでしよ!？」

俺の胸ぐらを掴みながらいう理斗に巴とひまりちゃんが腕を掴んで止めに入る。だけど、理斗の方が力が強いから状況は変わらず。未

だに俺の胸ぐらを掴んでる。

「あーくん、落ち着きなよ」

今の今まで黙っていたモカが口を開いた。その口調にはいつものおっとりとしたものはなく、ただただ冷静だった。

「これが落ち着いていられっか!?今の今まで俺は騙されてたんだぞ!それで落ち着いてられる奴がいんなら今ここに呼んで来いよ!」

「それでも、今やってることは最低なことだよ。あー君はただ教えて貰ってなかったから怒ってるんでしょ?大事な家族にそんなことがあったのになんで自分だけって」

モカが話していくうちに理斗も冷静になっていったのか、力なく胸ぐらから手を離して、ソファアーへと座り込んだ。モカはそんな理斗の手を握りながら話した。

「でもねあー君。大事なことを知らされてなかったからって海君を殴っていい理由にはならないんだよ。それにさ、あー君にとって海君は大事なお兄ちゃん、なんでしょ?」

「…モカの言う通りだ。でも、でもなモカ。大事だからこそ話して欲しかったんだ。家族だからこそ話して欲しかった。でもそれが無かった今、どうしたらいい?この怒りをどうすればいい?お前らにぶつけるなんて以ての外だ。だとしたら…どうすれば…いいのか俺にはわからねえよ…」

「理斗…」

俺が知らなければ幸せだと思っていた事で理斗は苦しんでいた。自分の自己満足で弟を追い込んでしまった。ましてや野球のことも悩んでいたであろうに無駄な心配を掛けてしまった。そんな昔の自分に、今までの自分に苛立つ。なんて無力なんだ、って。

今もそうだ。昔の因縁を決められずに引きづって、関係の無い人達まで巻き込んでしまった。今は害がないにしろ、いずれ諸星は俺の周りに手を出し始める。

そうなる前に、終わらせないといけない。

「海斗さん、大丈夫ですか?」

頬に冷たい感触が広がる。ふと目を向ければそこには氷袋を頬に

当ててくれながら心配そうにこちらを見るつぐみちゃん。

「うん、大丈夫だよ。心配かけてごめんねつぐみちゃん」

「… 理斗君がここまで怒るのって今までにあったんですか？」

ふとそんなことを聞かれる。思い返せばここまで怒りを顔にする理斗は見た事がない。

つぐみちゃんの問いに首を横に振る。

「海斗さん、これからは嘘つかずに話しましょう？どんなに優しい嘘でも、嘘は人を傷つけちゃいます。理斗君みたいに抱え込んで爆発する人もいます。だから、正直に話してください。だって——大切な家族なんですから」

… ああ、そうだ。君のその言葉に、その笑顔に俺はいつも救われる。君はいつだってそうだ。暗い道を照らして、導いてくれる。迷った時に必ず助けてくれる。暗い海で船乗り達を導く灯台のような存在。

だから、だからこそ頑張れた。君の笑顔が見たくて、頑張ってる自分を肯定して欲しくて。無意識の内に求めてたんだ。優しく接してくれるつぐみちゃんを。俺は甘えてたんだ。優しくしてくれるつぐみちゃんに縋ってたんだ。

もうそんなことは言ってられない。そんな時期は終わったんだ。だから、今度は俺が導かなくちゃいけない。大事な家族を、俺を越そうと頑張る弟を。俺にできることは——

「理斗。グローブ持って庭に出ろ」

「… は？何言ってるんだよ。こんな夜遅くに」

心底不思議そうに問う理斗にいいから早くしろ、とだけ言って自分の部屋に向かう。これであいつの不満が吐き出されるとは思っていない。だけど不器用な俺にはこうすることしか出来ない。こうやってしか聞けない。野球をやっていたからこそその手段。

「理斗、投げろ」

既に庭にいた理斗にそれだけ言って硬式のボールを軽く放る。それを受け取った理斗は何も言わずにストレッチを始めた。

俺も荷物置きにあるキャッチャー道具を引っ張り出して身につけ

る。

軽くキャッチボールをして肩を作っていく。

理斗の方が準備出来たら不満のぶつけ合いの始まりだ。

「ちよ、ちよつと待つてよ!?!何が始まるのこれ!?!」

「静かにねひまり。もう夜遅いから」

「いやなんで未来はそんな悠長にしてるの!?!」

「なあ未来一体何が始まるんだ?アタシ達に説明してくれ」

「見ての通り、ピッチング練習だよ。お兄も野球やってたからお父さんが小さい時に庭で練習出来るようになってブルペン作ったんだ。理斗も自主練でやるけど今回は違う」

「違うってどういうこと未来ちゃん?」

「お兄は理斗にこれで不満をぶつけさせる気なんだと思う。お兄も理斗も不器用だからこういう語り方しか出来ないんだよ。まったく」

出窓を開けてそこに座りながら説明をしていく。ホント二人とも馬鹿なんだから。お兄もお兄で少しヤケになってるし、理斗も理斗でムキになってる。

はあ、と溜息がこぼれる。これだから男の子ってのはめんどくさいと思ってしまう。そんな反面いいなあって思ってしまう。

「未来ちゃんは心配じゃないの?」

つぐのそんな質問にきよとんとしてしまふ。みんなも同じなのかこちらを見ている。そんな様子を見たら、なんか面白くてクスツと笑いがこぼれた。

「もちろん心配だよ?でもそれ以上に嬉しんだ」

「嬉しいってこんな事になってるの?」

「そうだよ蘭。お兄は一人で溜め込んで誰にも相談しないし、理斗はお兄が野球辞めちゃったことについてすつごく怒ってるから普段は

あんまり話さないし。みんながお兄と仲良くなってから、ううん。多分つぐと出会ってからお兄は変わった。あたし達にも何があったか話すようになったし、少しずつ理斗と仲良くしようと努力し始めた。それが嬉しかったし、悲しくもあった。あたしや理斗、それにみず姉でも変えられなかったお兄を簡単に変えちゃったから。あ、別に怒ってるとかじゃないよ？つぐやみんなには感謝してる。でもなんていうか、悔しいっていうかさ……」

自分で話していて涙が出そうになる。何もできなかった自分に腹が立つ。三年前もそうだ。あたしがあいつに捕まんなかったらこんな事にはなっていなかったのかな。そんなあたしを見かねてか蘭が隣にきて優しく抱きしめてくれた。

「蘭……？」

「無責任かもしれない。それでもいい、未来。あんたも理斗も頑張った。だからそんな顔しないで。昔は変えられなかったかもしれない。でも今は違う。あいつも変わろうとした。しっかりと前を向き始めた。ならそれを喜ばなくちゃ。また間違った方に行くかもしれない。今度はそつちに行かないように、間違わないようにすればいい。

それに未来は笑ってる方が似合ってる。いつも通りに元気な未来でいて」

「…うん、ありがとう蘭。あたしは大丈夫だよ」

あたしは蘭に、大事な友達に笑顔を向ける。蘭はそんなあたしを見て、満足そうに笑い返してくれた。まあその後、モカたちからものすごくいじられてたけど。

「二人ともケガしないでよねー」

あたしはもう大丈夫だよ、そんな意味も込めても二人に言う。もちろん二人からの返答なんて無い。これから始まるのは一方的な不満のぶつけ合いだ。あたしはそれを見守って、二人に笑顔を向けるのだ。

何だって二人とも大切な家族、なのだから。

「もういい、準備できた」

右肩を軽く回しながら言う理斗の目はものすごく鋭かった。これから試合、それも決勝戦のような大事な試合のような真剣さだった。ワインドアップからゆったりとしたフォームで、それでもしっかりと下半身に重心を乗せたボールは物凄く重かった。

ミットに収まれば、バシッ！と心地よい音が響く。

久々に受けた理斗のボールに成長したな、と思いながらもどこか寂しさを感じた。

「ナイスボール」

素直にそう口から出てしまう。それほどに素晴らしいと感じた。嬉しかった。でも、寂しい。

自分の中で矛盾したものがグルグルと回る。その後も理斗が要求する球種を投げていて気持ちがいいようにミットの芯でとらえる。

…そろそろか。

「なあ理斗」

「…なんだよ」

「いいボール投げるようになったな」

マスクを取って笑顔で語りかける。お世辞でも何でもない。心の底から思ったことを、いつもやれなかったことを、伝えたかった。

だからお前も伝えてこい。しっかりと受け止めてやる。なんせ俺はお前の兄ちゃんだから。

「何がいいボール投げるようになったな、だ…！今のなんの気持ちも込めてないボールのどこがいいボールなんだよ！兄貴はいつもそうだ！いつも上から物言わねえくせにこんな時ばかり兄貴ズラして！自分が傷つくのなんか構い無しに！俺はなアンタの背中に憧れた！あのマウンドで堂々として、カッコイイ兄貴の背中に憧れた！なのになんで簡単に野球を諦められた!?あんたにとって野球は

そんなもんだっ！たのかよ!？」

「…俺はあんたが高校に行かないって言い出した時に絶望したよ。俺の憧れた投手はもういなくなるんだって。アンタには失望したんだ。なのに今更なんなんだよ…。久しぶりのピッチングが、こんな適当な、不満を晴らす道具にされて…。」

「ああ！くそ！いいかここで宣言してやる！俺はあんたを超える！あんたが中学時代日本一の投手なら俺は高校で日本一の投手になってやる!!今に見てろよクソ兄貴！だからこのまま俺に付き合え！俺がいいって言うまで座って受け続けろ！」

今の言葉を聞いて安心した。いや出来た、の方が正しい。下の子達は俺の知らない間にこんなにも成長してたんだ。未だに前に進めていないのは俺だけだったんだ。いい加減、俺も一步を踏み出さないと。

「ああ、無理しない程度にな」

「理斗君、私は今怒ってます。何でなのか分かる？」

「いや、まあ」

「ハッキリしてね理斗君？」

「心当たりしか有りません！」

「…なにこれ。どういう状況？あれから理斗の気が済むまで投げて、切り上げてから互いに風呂に入った。理斗が先に入って今出てきたのだが。なんでつぐみちゃんの前で理斗が正座してんの？」

「ちよつとお嬢コレなに？」

「…つぐみが理斗があんたのことを殴ったのについて説教中」

何かつぐみちゃんが怒ってるの見るの初めての気がする。まあ出会ってから期間が短いから当たり前前だけだ。

いや、After growのみんなも驚いてるけどそんなに珍し

いの？

「あたしは初めて見るな」

「アタシも始めてみます…」

「あたしも…」

「モカちゃんも」

うむ、相当珍しいようだ。まあつぐみちゃんが怒るところなんて見るまでは想像もできなかったし。

「理斗君、あたしには下に弟も妹もないから理斗君の気持ちは分からない。でもね、それでも海斗さんが心配させないように話さなかったのは分かっているよね？」

「そりゃあ、まあ…」

「それでもね、人のことを殴るのは良くないよ。それに理斗くんはピッチャーなんですよ？海斗さんを超えようとするなら利き手は大維持にしてくちゃ。ね？」

ああ、あの子は天使だ。きっと天使がそのまま人になったんだ。大天使ツグミエルだ。

… 今度ちやつかり呼んでみよ。

「… 迷惑かけた、悪い羽沢」

「ううん、理斗くんが謝るのは私じゃなくて海斗さんにだよ？それと海斗さんもこれからは嘘つかない事！いいですね？」

「もちろん、同じ過ちは繰り返さないさ」

少し頬を膨らませながら言うつぐみちゃん。彼女にはホント頭が上がない。結局家族のことまで頼ってしまった。つぐみちゃんだけではない。蘭にも、モカにも、ひまりちゃんにも、巴にも。

みんなにしかつりと伝えよう。俺はみんなのおかげで変わったって。みんながいたから、今の自分がいるって。

「みんな、本当にありがとう。救われたよ」

〜夜中のできごと〜

海斗さんと理斗君の出来事があってから私たちはそれぞれの部屋に案内され、就寝をとった。元々夜が遅かったのもあるけど、今日一日で色々な事が多かった気がする。

海斗さんが仕事をしてる理由を聞いて、不良達との因縁がある過去を聞いて、未来ちゃんと理斗君、二人ともしつかりと和解して。

これだけの事が今日一日であつたから私も含め疲れてしまった。

部屋は未来ちゃんの部屋とその隣の空いていた部屋を借りました。元々は未来ちゃんの部屋だったみたいなんです。今の未来ちゃんの部屋はお母さんが使っていた部屋だそうです。

部屋にあつた荷物などはそっくりそのまま置いたそうで、未来ちゃんの部屋に私と蘭ちゃん、未来ちゃんの三人。隣の部屋にモカちゃん、ひまりちゃん、巴ちゃん。

部屋割りを決めたのももちろん未来ちゃんです。私と蘭ちゃんを同じにしたのは、「お兄のどこが好きか気になったから」らしく。蘭ちゃんはものすごく否定していた。

蘭ちゃん曰く、「あたしはただ単にあいつの相談役」だそうです。でも蘭ちゃん、海斗さんという時すごく楽しそうだよ？なんて言うてしまった時は顔を赤くしていた。

未来ちゃんは今度は私に標的を定めたかのように問いただしてきてた。

……あんまりここで言わなくてもいいですか？その、恥ずかしいから、ね？

そんな話をしていたら蘭ちゃんの目がトローンとしていた。それを見た未来ちゃんが寝よつか、と言い、蘭ちゃんをそのままベットに。未来ちゃんと私は床に敷いておいたお布団で。

眠気が来たのはすぐのことだった。

「あれ、まだ電気がついてる?」

ふと目を覚ました私は水を貰おうかななんて、思ってたリビングに向かった。

そこには明かりがついているはずがないのに。

「未来ちゃんは部屋にいたから、理斗君か、海斗さんさんかな?」

海斗さんがいいなあ、なんて思いながらリビングに足を踏み入れた。

そこにはやはりというかやっぱり海斗さんがいた。その手に白いギターと近くには黒いギターが立て掛けてあった。

海斗さんは不思議そうにこちらを見ていた。ふふっ、海斗さんのそんな顔を見て可愛いな、なんて思ってしまった。

「あれ、起こしちゃった?」

「いえ、何となく目が覚めちゃったんです。それとそのギターって…?」

答えは分かっていた。だけど、何となく口に出てしまったその問いに海斗さんは少し悲しそうに笑いながら答えた。

「二本とも両親のだよ。黒い方が親父の。白い方が母さんの。時々こうやって手入れはしてるんだ。なるべくあの二人には見えないところで。まだあの二人は俺みたいに割り切れてはいないからさ」

「ごめんなさい…」

分かっていた答えにも関わらず聞いてしまった自分が少し恨めしい。

海斗さんは優しい。それは私にだけじゃなくてみんなに優しい。こんなことを思うのはすごく図々しくて、狡いと分かってる。

その優しさを私にだけ向けて欲しい、なんて我儘にも程がある。

でも海斗さんもすごく狡いんですよ? 去年初めて会った時は物凄く怖い人なんだと思ってました。でもいざ話してみると優しく、不

器用で何に対しても本気で、人の痛みが分かる人なんだなあって今なら分かります。

会ってからしばらくした時にある物を貰ったんです。向日葵のアクセサリーを。彼曰く、妹に買ったのはいいけど本人はそんなに向日葵が好きじゃなかったから。なんて言っていました。

後々調べてみたら、向日葵の花言葉は「あなたのことだけを見つめます」で。えっと、その…ドキツとしちゃって。えへへ、その時から海斗さんのことを目で追ってはいたんです。

初めは好きって気持ちより憧れだったと思います。

その気持ちがいつかからか好き、に変わってました。

そんな懐かしいことを考えていたら頭にポンと手が置かれ、優しく撫でてくれます。

「大丈夫、俺は平気だし。つぐみちゃんが心配することの事でもないよ。それでもありがとう」

「えへへ、分かりました。海斗さんもう少し撫でてください」

「ご要望とあればいつでも、お姫様」

お、お姫様なんて…。今の私の顔は真っ赤なんだと思います。チラッと海斗さんの顔を見れば笑っていたけど耳が真っ赤でした。

「ふふっ」

「どうしたの？」

「いえ、海斗さんも照れるんだなって。耳、真っ赤ですよ？」

少し悪戯心が働いてそんなことを言ってしまう。それを聞いた海斗さんは顔を背けながら

「そ、そりゃあ俺だっつつぐみちゃんみたいに可愛い子にあんなこと言ったら照れるさ」

「あんなことってなんですか？」

分かっても聞きたかった。もう一回だけでも海斗さんの口から聞きたかった。そんな気持ちが私を私じゃなくするみたいにとんどん溢れてくる。

「…つぐみちゃんって意外に小悪魔なんですね」

ムム、何か勘違いしています。あたしがこんなになっちゃったのは海

斗さんのせいなんですから。それにこんなことするのは——
「海斗さんにだけですよ」

「海斗さんにだけですよ」

耳元で言われた一言。普段から知っているつぐみちゃんじゃなくてすごく小悪魔的だったけど、その一言で俺の理性を壊すのには十分だった。

夜中にギターを手入れをしていたらたまたまつぐみちゃんが来て、そこからそんな話まで発展した。

それになんだよお姫様って。恥ずかしいからね普通に。

そんなこともありつぐみちゃんが部屋に戻ってから手入れを終え寝ようとするも先程のことが頭を過り、一睡も出来ずに朝を迎えた。

特別編

番外編〈Halloween〉

「トリックオアトリート！お菓子くれないといたずらしちゃうぞ？」

「いったい何が起きているんだ？羽沢珈琲の扉を開ければ仮装をしたつぐみちゃんが。いや、つぐみちゃんだけなら分かる。何でAfter growのみんなや未来、しいては瑞稀までしているんだ。」

「なんか今日あったっけ？」

「え、えつと海斗さん？」

「ああ、ごめん。今日ってなんかあった？」

俺の言ったその言葉に店内にいたみんなが固まった。嘘だろうといった表情の巴やひまりちゃんや睨み付けてくる蘭と未来。あーあつて顔のモカや瑞稀。

あ、やっちまったつてすぐに分かった。

「じ、実は今日ハロウィンなんです。だからみんなで仮装して驚かせようよ…」

ああ、そういう事か。なるほど、だからつぐみちゃんも猫の仮装をしているのか。まあそれは置いといて。

「そっか。つぐみちゃん似合ってるよ。スゲー可愛い」

素直に褒めたらつぐみちゃんの顔がみるみる紅くなっていく。しまいには俯いてしまった。頭から湯気が出てプシューと音を立てているのではないかと言うほどに。

しかし、それは俺も同じで、みんながいる前でそんなことを言ったと分かった途端に顔が赤くなつていくのが分かった。

何より、つぐみちゃんのお母さんである美穂さんのあの満面の笑み。そしてお父さんである紘一さんは何でサムズアップしてるんですか。え？うちのつぐみは可愛いだろつて？そりやあもう可愛いすぎて天使に見えます。

「ホントお兄は……」

「まあ海くんだからねえ…」

「よし、あいつ今から殴るから」

「よっせって蘭。でも気持ち分かるぜ」

「ホント海くんはつぐのこと好きだよね」

「羨ましいけど…あそこまで言われると流石に…」

なんだ、みんな揃ってこつちをジト目でみて。…うん、分かった。いつものやつだ、やってしまったんだなこれ、と思いつぐみちゃんを見ればプルプルと顔を赤くして震えていた。

「か、海斗さんのバカ!!」

そういうや否や急に抱きつかれた。いや恥ずかしいのはわかるけど急抱きつくのはどうかと思うよ？

つぐみちゃんに聞いてみれば

「お菓子くれなかつたらイタズラします。海斗さんにはこれからこのまま過ごしてもらいます」

なんてほんのりの頬を染めながら言うつぐみちゃん。

なんなのこの子。狙ってやってるのこれ？だとしたら小悪魔的だし素でやってるとしたらもうお手上げだよこんなの。

「あくそういえばもつと面白いもの見えるよ」

なんてモカが言い出すからとみんな期待して待ってたんだ。

だけど中々現れない。そんな中モカが店の裏側へと歩いて行った。

そして――

「ほくら、みんな待ってるんだよ？早くしないと」

「おまつ！面白がってやっていい事とダメなことがあるだろ!?これは流石に無理だつて！」

……………

「何か聞き覚えのある声がしたんだけど…未来まさかと思うが…」

最悪の考えが頭を過つたがそれは流石にと思ひ、妹に聞いてみたが

「てへぺろ(´▽`)/」

…やりやがったなこいつ！凡そ誰がいるのかは分かった。問題はその服装だ。おかしなものでなければまだ大丈夫。あいつの尊厳も

保てるだろ。だけど、恐らく準備をしたのはモカだ。そうなるよ……ダメだなこりゃ。

「は〜い。準備が出来たので今から行くよ〜」

「ちよつと待ってって！俺の心の準備が出来てねえよ!!」

「うるさいなく。男の子は度胸だよ〜」

「んな棒読みで言われてもーうおおあ!」

押されたのか出てきたのは――

「……もう殺してくれ!」

魔法少女のコスプレをした我が弟の理斗。はあ…最悪の考えが当たってしまった。

「ぶっ……あはははは!!ちよつと理斗何その格好!」

「ちよつと未来!ぶっ!笑っちゃダメだよ……!」

「あははは!理斗可愛いぞ〜!流星は私の弟だね!」

「あはははっ!似合ってるぞ理斗!」

「理斗君可愛いよ!あはは!」

顔を赤くして悔しそうになのか、恥ずかしいのを我慢してるのかスカートを手で握りしめている。まあモカに任せたらこうなるわな…。

そして瑞稀理斗は俺の弟だ。そこ間違えてるぞ。

「…ふふっ!」

ふとつぐみちゃんの方を見れば笑うのを必死に堪えているではないか。そんな様子もすごく可愛いのだが。

視線を理斗の方に向ければみんなから写真を取られまいと必死になっている。モカに至ってはスカートを捲ろうとスキをうかがっている始末。

そんな光景を見て、自然と笑みがこぼれる。自分がどれだけ幸せなのか、周りの人に恵まれたのが分かる。

だからこれからもこんな幸せな時間が続けばと願うばかりだ。

「海斗さん?」

不思議そうにこちらを見るつぐみちゃん。そんな彼女に何でもないただけ笑い返す。でもいつかは伝えたいことがある。こんな俺だけど来年も再来年もできればこれからずっと――

俺のことを支えてください。

Happy Birthday

「ということでは海斗さんにはこれを渡して欲しいんです!!」

どうも皆さん、綾部です。休みの日にAfter glowに何かとあれば集まっていた公園に呼び出されたと思った矢先、ひまりちゃんから渡される小さな箱のようなもの。

「急すぎで話が見えないんだが…。それにつぐみちゃんは？」

「つぐみの誕生日祝うのにつぐみがいたら台無しでしょ。あんたバカすぎ」

ジト目で睨んでくる蘭。あのさ、お前俺に対して当たり強すぎんだよ。何だ？人を煽る天才か？

「なら、これはお前らが送れよ。そっちの方が喜ぶと思うぞ？」

「…それほんとに言ってるのか海斗さん？」

「ここまでくるともうアホとしか言えないよね」

「つぐ、可哀想…」

「あんた死ねばいいよ」

「えっ。そこまで言われなくちゃだめ？」

何か最近のこいつら俺に対して容赦がない。つぐみちゃんの次に常識的な巴さえでもかなりひどい時がある。

「俺は俺で別のもん送りたいんだよ。だからつぐみちゃんが欲しいもんでわかってるか？」

それを聞いた瞬間にひまりちゃんが元気よく手を挙げた。

「ハイハイハイ！やっぱアクセサリーが一番でしょ!!」

それと夜景が綺麗なレストランとか。んんー!!最高じゃん!!それにしようよー」

「はいはい〜ひーちゃんは少しだけ静かにしようね〜」

「えっ!今のダメ!?!それにモカ、ちよつと冷たいような…」

「気のせいですなく。それとモカちゃんにいい案がありますよ。聞きたいですか〜お客さん？」

「いやお前どこの悪徳業者だよ…。じゃあ頼む、聞かせてくれ」

「ふっふっふ。それは〜婚約指輪あげちゃえばいいと思うだよね

」

「「こ、婚約指輪?!」」

ダメだ。こいつの案が一番当てにならない。なんだ、婚約指輪って。付き合ってもないし、それに渡されても困るだろうが。未成年なんだし。

「却下だ」

「ええ〜いい案だと思っただのに〜」

「婚約指輪のどこがいい案なんだよ!?!どんな思考回路してんだ!?!」

「そうだよモカ。こいつにつぐみは渡さない」

つぐみ親衛隊隊長の蘭がこちらを睨んでくる。戯け、貴様程度の睨みで……痛い痛い!!足踏まないで、頼むから。

「そういえば海斗。つぐみが夏に付けてた向日葵のアクセサリー、あげたのあんたでしょ」

なんーか疑問形出なく聞こえるんだよな……。これ質問だよね？

「あ、ああ。たまたまだけだな。あげた時はすごい嬉しいそうにしてたなあ」

あげた時のあの笑顔といえは最高だったなく。

「ちなみに向日葵の花言葉って知ってる?」

花言葉? いや全く知らないけど。

『あなたことだけを見つめます』

「え?」

それを聞いて思考が飛んだ。蘭、もう一回頼む。

『あなたのことだけを見つめます』それが向日葵の花言葉」

「oh……」

一年前の俺マジで何してんだよ……。いやそんなの知らずに渡してるからあれだけどさ。

「海斗さん…大胆!!いいな〜つぐ。あたしにもそんな人現れないかな〜」

「ひーちゃんは変な人に関わって〜結婚できないような気がする〜」

「モカ!?!なんでそんな事言うの!?!もちろん、巴はそんなこと思ってないよね?」

「あ、ああ。モチロンだよ」

いやなんで片言なんだよ。さてはお前も同じ考えだったな巴。素直に謝れば許してくれるさ。

「なんで目を逸らすの!?!それに片言!?!うわぁーん!!酷いよみんな!?!」

おい、マジで泣き始めたぞひまりちゃん。何とかしろよお前ら。いや待て、何でこっち見んだよ。どう考えてもお前らのせいじゃねえーか。

…まあ俺も同じ考えだったから何も言えないんだけど。

「ひまり、大丈夫だよ。ちゃんとひまりのこと見てくれる人が現れるよ」

「蘭……!?!」

「時期はわかんないけど」

おまつ、最後のは余計だろ…。もうこれ、収集つかねえよ。

「うぐっ…みんな酷いよ…。あたしのこといじめてそんなに楽しいの…」

何とかひまりちゃんの事を慰めて、この地域で一番でかいショッピングモールへと向かってる。

理由?そんなのつぐみちゃんへのプレゼントを買うためだよ。最初の箱?ああ、あれには何も入ってなかったよ。

何でもアクセサリを買えってことだったらしい。いや普通に言えよ

「まさか〜ひーちゃんがここまでダメージ受けるとは思ってなかったんだよ〜」

「ひまりはそんなにタフじゃないよモカ」

「蘭まで酷い!?!」

「はっはは、でもそんな所もアタシは好きだけどな!?!」

さて、四人はガールズトークに花を咲かせてるし、何がいかだけでも決めとくかな。

つぐみちゃんなら、そんなに派手なものは好まないだろうし。ここは無難にネックレスとかか？

経験がないから何を贈ればいいのかわかんねえよ。

「それで何贈るか決まった？」

「うわっ、びつくりした。まあ大体は。蘭は？」

急に話しかけてきたから誰かと思えば蘭だった。他の三人は後ろでワイワイと話している。

正直助かった。何を贈ればいいのか分からなかったから相談しよう。

「あたし達はもう決まってる。それで？何を贈るの？」

「まあ無難にネックレスとかがいいかなって。つぐみちゃんは派手目なのは付けなさそうだし」

「ふーん、ちゃんと分かっているんじゃない。それでいいと思うよ。あんたから渡されればつぐみも嬉しいだろうし」

「そんなもんか？」

「そんなもんだよ」

それを最後にショッピングモールへと着くまで会話はなかった。だけどそんなに苦ってわけでもなかった。

何かと一緒にいたから、変に気を遣うこともないし。安心できるつっつか、居心地がいんだよこいつの隣は。

「モカちゃんお腹空いた〜何か食べようよお〜」

「モカ、せめてつぐみへのプレゼント買ってからにしろよ」

「ええー！あたしもお腹ぺこぺこだよお!!」

「ひまりはそれ以上食べるとまた太るぞ？」

ショッピングモールに着いた途端にモカがダウン。ひまりちゃんも同じく。集まったのが昼前だったから丁度といえばそれまでなのだ。

てか、俺以外プレゼント買ってるんだろ？なら俺だけ行けばいいじゃね？

「「確かに」」

「なら何でお前ら一緒に来たんだよ…」

「いやーあたし達も暇でさ。丁度いいかなって」

俺はついでか巴よ。…まあいいや。

「なら俺だけ買ってくるから、四人飯食つとけよ。それならいいだろ？」

「「海斗さん（あんた）のセンスに任せたらまずいよ」」

「お前らな…！」

一言一句間違わずに言い放つてきやがって…！。よーしなら見せてやるよ！俺のセンスがおかしくないって！

「これはどうだ？似合うと思うけど」

「却下。こんな変なのつぐみは付けない」

一店舗で紫に輝く大きめの宝石がついたネックレスは却下され

「じゃあこれは？」

「ダメですな。つぐみには合わないよ」

一店舗目で少し（かなり）パンクなネックレスも却下され

「じゃあこれ！」

「無いです！つぐみはもつと可愛らしいのが似合います！」

もはや男向けのネックレスを選び――

「これしかない!!」

「海斗さん、流石にそれは…」

最後に選んだものはもはやネックレスですらなかった――

「もう無理…頭パンクする」

「センスのセの字もないね」

「あたしら着いてきてやつぱは正解だったな」

うるさいぞそ二人。四人からダメ出しをされながらとぼとぼと店内を歩く。

もう…()で最後にしよ。

目に入ったお店へと入っていく。

少し店内を歩きながら、選んでいく。もちろん、四人の監視付きだ。

「これは…」

目に入ったのは少し小さめなオレンジの宝石が付いたネックレス。これ、にしよう——

「まあいいじゃない。それなら文句はないよ」

「なーんだ、カイくんもちゅんと選べるじゃーん」

「それならつぐみも喜ぶと思いますよ！」

「最後の最後でいいの見つけたな海斗さん！」

後ろから見えていた四人からも絶賛だった。…ん、これって一月の…

「あ、お客様。こちらをお買い上げになりますか？」

「あ、はい。あと出来ればラッピングもお願いできますか？来週誕生日なんですよ」

「ええ!! 勿論です! だとしたら誕生日は一月七日ではありませんか？」

「え、ええ。そうです。何故わかつたんですか？」

「こちらのネックレスについている宝石はですね——」

店員さんからの説明を受けた俺達は驚いた。まさかこんな事が起きるなんて、な。

一月七日。つぐみの誕生日である。待ち合わせは羽沢喫茶店。毎年祝っているらしく、今年も例に漏れずにそこらしい。

「お兄ー。あたしも片付け終わったら行くからさつきに行つてー」

「分かったよ。気をつけて来いよ？」

「もつちろん。それと、ちゃんと渡しなよ？」

それだけ言い残して、未来は台所へと行つてしまった。

…参ったな。妹にすら心配されるなんて。

これだけはしっかりと渡そう。普段のお礼も込めて。

そう決意して、俺は家を出た。

羽沢喫茶店へと着いてみればもう、みんないるではないか。
カランカランと呼び鈴が店内へと響きながら、扉を開けた。

見てみれば、みんな待ってましたと言わんばかりの目をしていた。
その中でもつぐみちゃんが一番目を輝かせていたように見えた。

「海斗さん！いらっしやいませ!!…来てくれないと思ってました」

「ははっ、それはないよ。もし、大事な仕事が入って来てたから」

「そ、それはダメですよ!!仕事の方が大事なんですから!!」

「うん、今日は休みだよ」

それを聞いた途端につぐみちゃんは顔を真っ赤に染めた。

真っ赤なまま、俺の胸をポコポコと叩いてくる。

「海斗さんの、バカ」

少しいじけながら口を尖らせて紡いだその言葉に俺の脳内はパンク寸前。

なんなのこの子、可愛すぎでしょ。

「ほら、夫婦漫才してないで早く入っておいで。外は寒かったでしょ？」

そう声をかけてきたのはつぐみちゃんのお姉…お母さんである。

ホント、若いよなあ。

「あら、ありがとう海斗くん。こんなおばさんに若いなんて上手いのね♪」

…ホントとなんで心の声を読んできるか？この人にどんな事があっても勝てる気がしない。いや、マジで最強だよこの人。

「海斗、未来は？」

「もうすぐで来ると思うよ。家事の方も終わりかけてたから」

「ん、そう」

そう言う蘭の顔は笑顔だった。未来にもいい友達が恵まれたな。

「お待ったせー!!主役は遅れて登場するもの!!みんなのアイドル未来

「ちゃんだよー!!」

「いよっ!待ってました!」

そんなこと言いながら入ってきた未来に俺と理斗が合いの手を入れる。

…理斗?なんでいんの?

「未来ねえに引っ張られてきた」

ああなるほど。まあこれで全員揃ったみたいだし。

「それじゃ!音頭はこの、上原ひまりがたん「つぐみ誕生日おめでとぉ!!」って未来!?あたしの役なんだけど!」

「いやだつて長いんだもーんひまりの口上」

「今の口上じゃないからね!?ううっ…!!もう!つぐみ誕生日おめでとぉお!!」

「めちやくちやじゃねえーか」

やけくそ気味のひまりちゃんの音頭に全員が笑った。ホント面白い子達と出会ったよ。

「海斗さん」

「ん?ああつぐみちゃん」

誕生日パーティーも盛り上がった。未来と理斗のショートコントだったり、モカの一発芸だったり。いや、モカのは一発芸じゃねえわ。あれはただのすごい技だわ。

「今日はありがとうございしました。私、すごく楽しかったです」

「それなら良かった。ちゃんと四人にも言っただけな。俺なんて何もしてないんだから」

「いいえ、今年は海斗さんがいました。去年まではいなかった海斗さんが。それがすごく嬉しかったんです」

「つぐみちゃん…」

ホンつとなんていい子なんだろう。ああ、そうだ。ちゃんとまだ伝えてなかったな――

「つぐみちゃん、誕生日おめでとう」

この言葉と一緒に先週買ったネックレスを渡す。店員さんも氣遣ってくれて物凄く丁寧にラッピングをしてくれた。

ほんと有難いよ。

「え、私に、ですか？」

「もちろん」

「あ、開けてもいいですか!？」

「どうぞ」

少しドキドキしながら開けたつぐみちゃんはネックレスを見てわああと声を上げた。

「すごい綺麗です…でもこんな高そうなもの貰えないです」

「気にしないで。それはプレゼントと普段のお礼も含まれてるんだ」

「普段のお礼、ですか？」

「うん。去年の夏、俺は君に出逢わなかったら今も昔と変わらずに周りを見ずに走り続けてた。恐らく死んでもおかしくなかったよ。でも君が俺の光になってくれた。俺の事を導いてくれる光になってくれた。諸星の時だって怖い思いを我慢して助けに来てくれた。そんな君に感謝を」

「海斗さん……」

「それにそのネックレスについてる宝石。一月七日の誕生日石なんだ。石はガーネット。ガーネットってこんな意味にも使われんだ。それは——」

それを聞いたつぐみちゃんは俺に抱きついてきた。ほら、泣かないだよ。君に似合うのは綺麗な笑顔なんだから。

ガーネットの石言葉。それは——『真実の愛』

Happy birthday!!

「お父さん！お父さん！」

「どうした向日葵？」

一月三日、正月も終わりの今日。リビングでくつろいでいると娘の向日葵が勢いよく駆け寄ってくる。恐らく四日後のことだろう。

「今年のお母さんの誕生日どうするの？」

「うーん…。どうするかな…」

「え、なんにも決まってるの？信じらんない」

「え、なに。向日葵はお小遣い減らされたいの？」

そう言う向日葵は涙目になり足元に縋ってきた。

「うええ…違うもん！お母さんが毎年飽きないようにしたいだけどもん！なのにお父さんが虐めるうう…」

「ハイハイ、分かったよ。…そうだピクニックってのはどうだ？」

「え？この寒い時期に？」

「だっていつも小旅行みたいな感じだけど」

「でもそれだとお店は？おじいちゃんとおばあちゃんに任せるの？」

「チツチツチツ…。考えが甘いぞ我が娘よ。実はな——」

「ってことでつぐみを誘ってくれ太陽！」

「はあ…んなの自分で誘えよ」

呆れたように溜息をつく今年で中学三年になった長男の太陽。まあその気持ちもわからなくもない。毎年祝うたびに頼まれてたかな。

はいそこ、自分で誘えとか言わない。

「だってよ、毎年祝う度に「お正月あけてすぐなんだから別にやらなくていいよ」って言うんだぞ？それにお店はって言われるのがオチだよ」

「じゃあやらなくても——「それはダメだ！」…なんでさ」

「俺のプライド！」

「そんな安いプレゼント捨てちまえクソ野郎」

こいつ、実の親父にクソ野郎だと？誰だこいつを育てたのは！あ、俺だわ。

「よし、太陽の小遣いは無しな。あーあ折角小遣い増やしてやろうなんて思ったのに」

「一体俺は何をすればいい父上」

ほんつと変わり身の早い奴。まあ俺がこうなら息子もこうなるわな。

「じゃあいいか？今年はな——」

「それじゃお義父さん、お義母さんよろしくお願いします」

「ハイハイ、任せてね」

「…気をつけて行くんだぞ」

「もう二人共心配性なんだから…」

一月七日、早朝。つぐみの両親にあとをお願いし車で家を出る。無
論、子供達は眠いのか既に夢の中だ。

つぐみは助っ席で外を見ながら柔らかな笑っていた。

「どうかした？」

「ううん、なんだか懐かしくて」

「懐かしい？そんなに掛けてなかったか？」

俺の返答が違かったのかクスクスと笑いながら言った。

「付き合ってから、少しして二人で旅行に行ったでしょ？その時もこんな感じだったなって思い出してたの」

「まだつぐみが大学生になったばかりの時か。…：：：周りからはものすごく反対されたけどな」

特にあの反骨赤メツシユが。久しぶりに会ってもまだ赤メツシユが入ってたから、いい加減歳考えれば？なんて言ったらぶん殴られたわ。

まあまだ二十歳にもなってなかったからいんだろううけどさ。

「あはは…でも蘭ちゃんと言ってたとおりになっちゃったね」

「……黙秘権を行使します」

「フフッ」

まあなんだ。お互いに大人に近づいたとだけ言っておこう。

「わあ広い！」

「へえーこれで日帰り温泉なのか」

やって来たのは有名どころの温泉。流石に二日間も店を任せては
いられないので今回は日帰りだ。

「それじゃ行こうか」

「ええそうね」

四人で施設内へと向かう。今回の小旅行、誕生日ということもある
が別に普段からの感謝もあるのだ。

こんな俺と一緒にいってくれて、育児をしながら店を手伝ってくれ
て。こんなことでしか返せない俺を許してくれ。

「そんなことないよ。海斗さんと一緒にいたいって思ったのはあかし
だもん。それにね、今あたしはすごく幸せだよ」

隣に来て囁くつぐみ。ほんと、つぐみには参ったものだ。昔は頑張
りすぎるくらいに真っ直ぐで純粋な子だったのに。

「むう…バカにしてる?」

「いや、そんなことないよ。…それよりもつぐみ。俺の心の声読まな
いで」

「ねえねえお母さん。お母さんの初恋ってお父さんなの?」

温泉に浸かってゆっくりしている時、向日葵が急に聞いてきた。向
日葵もそういう年頃だからね。

……少しくらい話してもいいかな。海斗さんは恥ずかしがって話
したがらないから。

「うん、そうだよ」

「じゃあじゃあどうやって知り合ったの?おばあちゃんからお母さん

はずっと女子校だったって聞いたけど。大学の先輩とか？」
「ううん、違うよ。…どこから話そうかな。お父さんとはね——」

「なあ父さん」

「どうした息子よ」

「父さんって昔野球やってたんだろ？」

「やってたぞー。それに理斗もな」

「理斗叔父さん知ってる。プロなんだから…ってそういう事じゃなくて。父さんはさ限界って感じたことある？」

「限界かあ……」

俺は高校では出来なかったからあれだけど。そうか…太陽もぶつかったか。

「太陽は、将来どうなりたい？」

「将来？仕事とか？それとも夢の話？」

「どっちでもいいいさ。自分がこれならずつと続けられるってもん。もしくは夢だな」

そう言うのと太陽は空を見ながら、少し考えた。うーんと唸りながら空を見たり温泉に潜ってみたり。

大いに悩め。お前には選択出来るもんがいっぱいあるんだ。俺とは違う。俺の時とは何もかもが違うんだ。

「今はやっぱり野球しか考えられない」

「——そうか」

「俺さ、叔父さんに聞いたんだ。父さんのこと」

「俺の事？」

「うん、父さんが野球やってた頃とか働いてた時のこと。あと母さんとのことも聞いた」

あの愚弟め…。余計なことまで話やがって。

「それで？」

「日本一のピッチャーだったんだろ？何で簡単に諦められたの？好き

「じゃなかったの野球？」

「なんだ、そんなことか。理由はな――」

「もちろん諦めきれなかったさ。でもそれ以上に守りたいって思ったんだ。理斗のことも未来のことも。俺は長男だ、下の子を護ってやるために先に生まれたんだから。俺にとって二人が大事だったんだ、野球よりも」

それを聞いた太陽はそっか…とだけ呟いた。それ以降会話はなかったが

なにか吹っ切れたんだろう、目付きが顔色が来る時よりも変わっていったから。

「ンンー！気持ち良かったー！また来ようねみんなで！」

「そうだな、つぐみはどうだった？」

「気持ちよかったよ、向日葵と色々話したし」

「ねー！お父さんもかなりのやり手ですなあ」

なんて言いながら肘でつついてくる向日葵。一体何を話したんだよ…。

「太陽はどうだった？気持ちよかった？」

「いい感じだったよ」

「――そう」

太陽の一言につぐみは微笑んだ。恐らくつぐみは太陽が何に悩んでいたのか分かっていたんだ。それに恐らくこの場にはいない未来や理斗も。

「――全く父親失格だなこりゃあ」

小さく呟いた一言は誰にも聞かれることは無かった。

そろそろいい頃だな…。

「さてじゃあ帰るか」

向こうの準備も大丈夫な頃合だろ。

「あれ電気ついてる？お父さん達まだいるのかな？」

「そう言い裏口から入ろうとするつぐみを正面の方もまで連れていく。」

「え、え？ちよつとどうしたの？」

「誕生日おめでとうつぐみ」

「それだけ告げ、扉を開く。その瞬間、クラッカーの音が店中に響き渡る。」

中にいたのはAfter glowに未来と理斗。お義父さんとお義母さん。それにみんなの子供たち。

「え？なんでみんなが？」

「隣にいるそのバカが急にサプライズしたいから手伝ってくれて」

「もつと早く行って欲しかったな」

「でもそこが海斗さんらしいよね！」

「懐かしいな。クリスマスもこんな感じじゃなかったか？」

「久々に会った幼馴染達は昔と変わらずにいた。まあ蘭は別として。」

「急に連絡来たと思ったらもうやることがお兄だよね」

「しようがねえよ。あれが俺らの兄貴だから」

「おいそこ、人をバカ呼ばわりするな。」

「「「「事実バカでしょ」」」」」

「六人揃っていなよ!？」

「あは、あははは！」

「つぐみ？」

「急に笑い始めたつぐみに近づけばあれ？少し泣いてる？」

「ううん、嬉しいの。これ太陽と向日葵も知ってたでしょ？」

「そ、そりやあまあ？」

「——そっか。ありがと三人とも！」

ああ、ほんと君の笑顔は。本当に俺を安心させてくれる。心を照らしてくれる。それは今も昔も変わらず、優しい光だ。

「それでつぐみ」

「ん？」

「その、プレゼントなんだけどこれじゃダメか？」

つぐみの耳元へと近づき囁く。

——三人目をプレゼントします——

「!!」

それを聞いた途端顔を真っ赤にさせ、ポカポカと胸を叩いてくる。

「ちよつとつぐみに何言つたの」

「まさかく変なお願い？」

「海斗さんらしいというか…」

「まあ海斗さんじゃないとやらないよな…」

「何言つたのお兄!?!」

「まあた馬鹿なこと言つたんだろ、兄貴のことだし」

ああほんとにこんな瞬間が幸せでたまらない。

父さん、母さん。俺はこんなにも恵まれました。産んでくれてありがとう。

そしてこれからも——

「よろしくなつぐみ」

「——!はい!」